

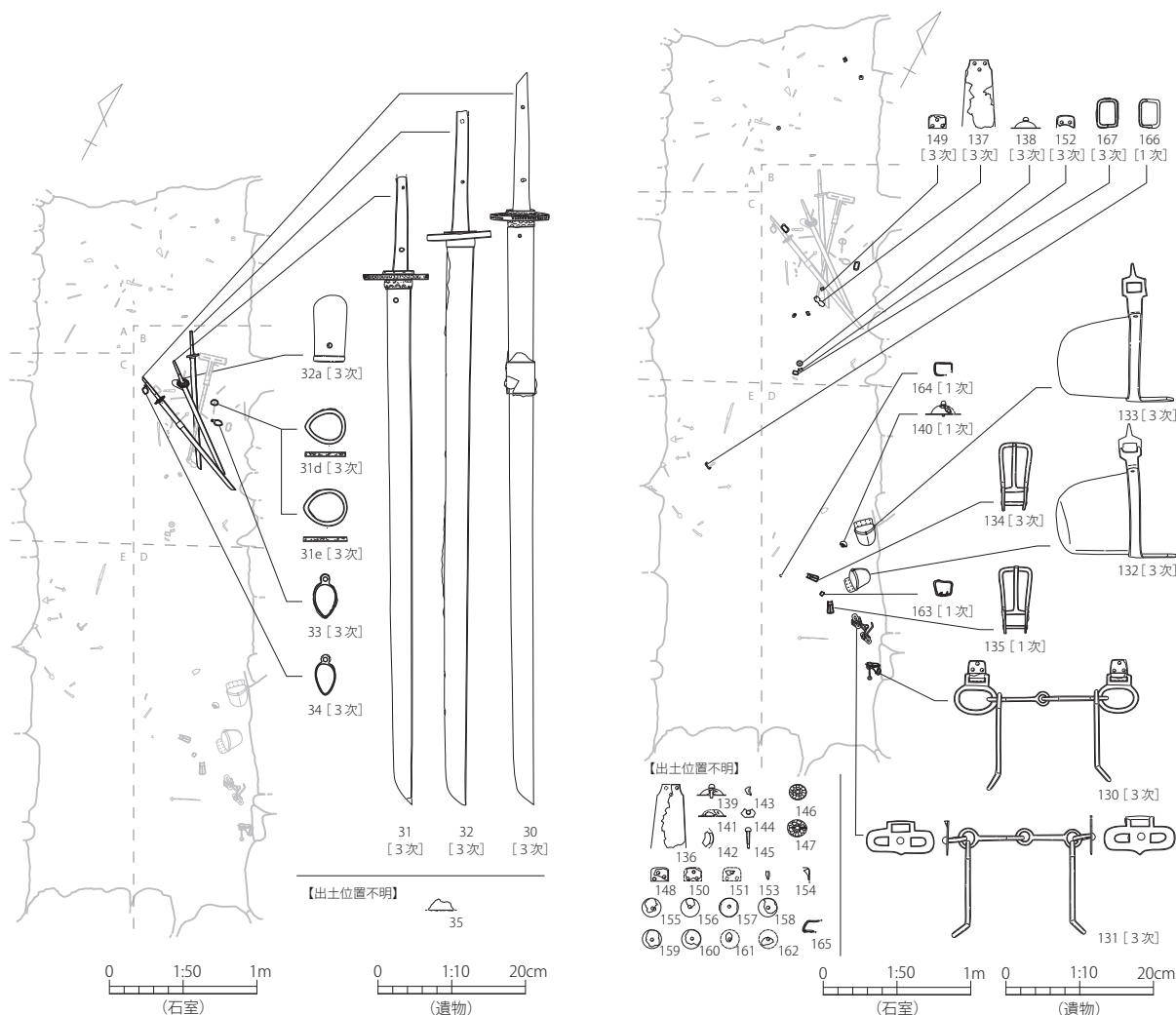
第3節 東平1号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像

大谷 宏治

はじめに

東平1号墳の副葬品のうち、大刀では象嵌装鍔付大刀2点(30・31)、鉄製鍔付大刀1点(32)のほか、鉄製無象嵌円頭大刀柄頭1点(32e)、足金物2点(33・34)、象嵌装責金具2点(31d・31e)、大刀に伴う金具(35)が出土している。刀身から大刀は3点副葬されているが、円頭柄頭等刀装具がどの大刀に装着されるのか(拵え)については後述する。馬具では轡2組—鉄製横長心葉形鏡板付轡1組(130)^(註1)、金銅製带状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡1組(131)—、銅製壺鐙1組(132・133)、金銅製(無文)

棘付花卉形杏葉2点(136・137)^(註2・3)、金銅製帶金具・飾金具(半球形5点以上、断面コ字形隅切方形金具4点、断面コ字形半円形切入方形金具1点、断面板状円形金具8点、138～162)、鉸具2点(134・135)、鉄製ロ字形金具(帶留金具か)大2小3点(163～167)がある。鞍に伴う海金具や磯金具、鞍金具は出土していないため、鞍については金具を伴わない木製品であったか鞍そのものが副葬されなかった可能性が高い。ここでは、副葬された馬具・大刀から東平1号墳の被葬者像を明らかにしたい。



第73図 東平1号墳大刀及び馬具出土状況図

第5表 鉄製無象嵌円頭大刀出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	材質	鏝	刀身	文献
下舐牛伏1号墳	群馬県伊勢崎市	方	18.7	横石	鉄製	八窓鏝	両関	1
立野12号墳	埼玉県熊谷市	古墳	—	横石	鉄製	不明	不明	2
比奈窪中屋敷15号横穴墓	神奈川県中井町	横穴墓	—	横穴	鉄製	八窓鏝	両関	3
東一本柳古墳	長野県佐久市	円	10+	横石	鉄製	不明	不明	4
東平1号墳	静岡県富士市	円	13	横石	鉄製	八窓鏝？	両関？	本書
醍醐1号墳	京都府京都市	円	22	横石	鉄製	六窓鏝？	不明	5

墳形 円＝円墳 方＝方墳 古墳＝墳形不明 埋葬施設 横石＝横穴式石室 横穴＝横穴墓

1 大刀の帰属年代

(1) 大刀拵えの復原

東平1号墳の大刀3点は、鏝、柄縁責金具、釰は装着された状況で出土したが、円頭柄頭1点、鉄製吊金具2点、象嵌装鉄製責金具は刀からは外れた状況で出土した（第73・74図）。この取り外しが副葬時に行われたか、追葬の際のかたづけで外されたのか不明確ではあるが、最終段階では大刀（30）の鞘口金具を除いて、鞘は外され、柄頭も外された状態で配置された。そこで編年的位置づけを探る前に、刀装具の出土位置や特徴などから、外れている刀装具について、他の事例などとの比較を通して検討し、大刀3振の拵えを復原しておきたい。

無象嵌円頭柄頭 鉄製無象嵌円頭柄頭は、隅抉（欠）のある象嵌装大刀（30，Aとする）には装着されない可能性が高い。出土位置からは象嵌装大刀（31，Bとする）、八窓鏝付大刀（32）のどちらに装着されたか判断できない。無象嵌円頭柄頭は象嵌装円頭柄頭の影に隠れて目立たないが、東平1号墳以外にも管見で5例存在する（第5表）。このうち拵え全体が出土しているのは神奈川県比奈窪中屋敷15号横穴墓^{（註4）}と群馬県下舐牛伏1号墳である。いずれも無象嵌の鉄製八窓鏝を伴い、両関である（第

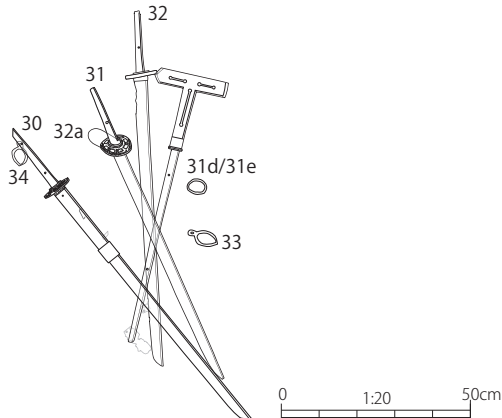
75図）。この2例から判断するのは心許ないが、東平1号墳では鉄製無象嵌八窓鏝付大刀が出土していること、象嵌装鏝付大刀で鉄製円頭柄頭をもつもので円頭に象嵌が施されないものは管見では確認できないことから、象嵌装大刀Bではなく、鉄製円頭柄頭はこの八窓鏝付大刀の柄頭であると判断した。

象嵌装責金具 象嵌装責金具2点は、文様が二重半円文であること、象嵌装大刀Aに装着された鞘金具と形状が合わないこと、象嵌装大刀Bの釰の文様に二重半円文が採用されていることから、象嵌装大刀Bに伴うものと判断した^{（註5）}。

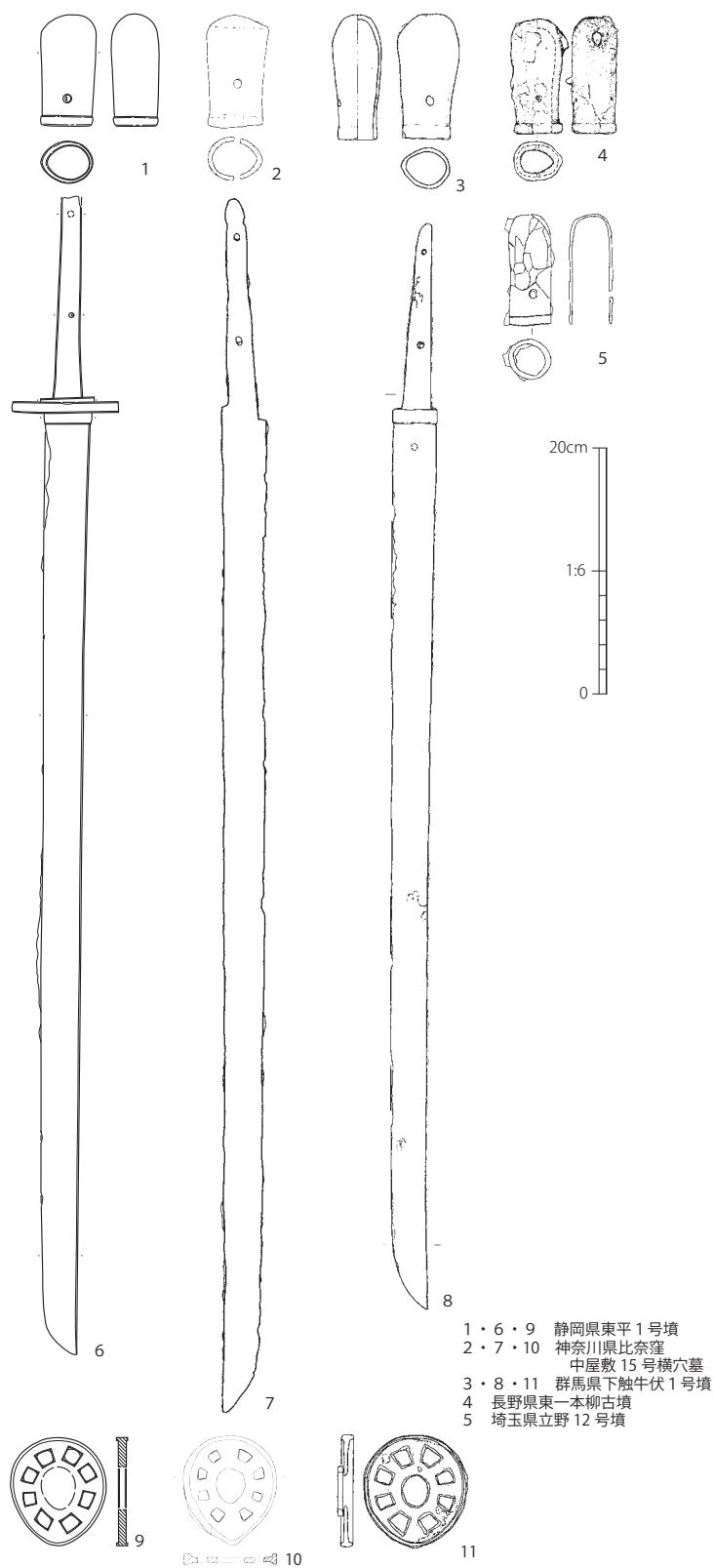
吊孔付足金物 佩用金具である鉄製吊孔付足金物2点は同形状であることから同一の大刀に伴う可能性が高い。象嵌装大刀Bに伴う象嵌装責金具とは形状が異なること、無象嵌円頭大刀は類例として挙げた2例ともに足金物を伴わないこと、象嵌装大刀Aの鞘金具の断面形状と大きさが吊孔付足金物33とほぼ同一であることから象嵌装大刀Aに伴うと判断した。なお、33が鏝側、34が切先側に取り付けられた可能性が高い。34が33より内孔がやや小さいことから、大刀の鞘は切先に向かいやや細くなるような構造であったことが窺える。

東平1号墳出土大刀の拵え 上記により、東平1号墳の大刀は、佩用金具付（二足佩用）象嵌装八窓鏝付大刀1振、象嵌装八窓鏝付大刀1振、鉄製無象嵌八窓鏝付円頭大刀1振の3点であり（第76図）、金属製の鞘金具がない、あるいは少ない、素鞘（瀧瀬1984）であることが判明した。

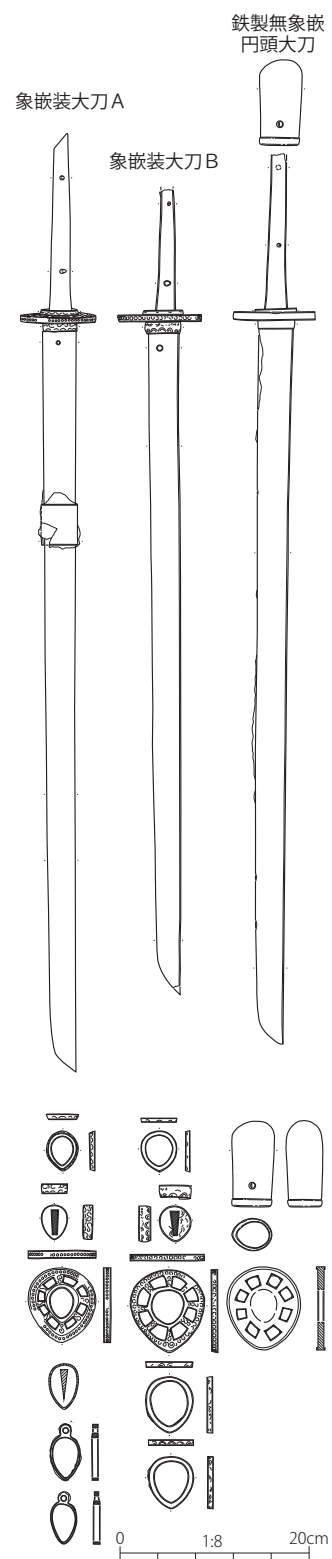
なお、東平1号墳は象嵌装大刀2振、八窓鏝付円頭大刀1振を有するが、方頭大刀など金銅装大刀を保有しないところに特徴がある。また、象嵌装大刀2振は有機質製の柄頭で頭椎か円頭大刀である可能性が高い。



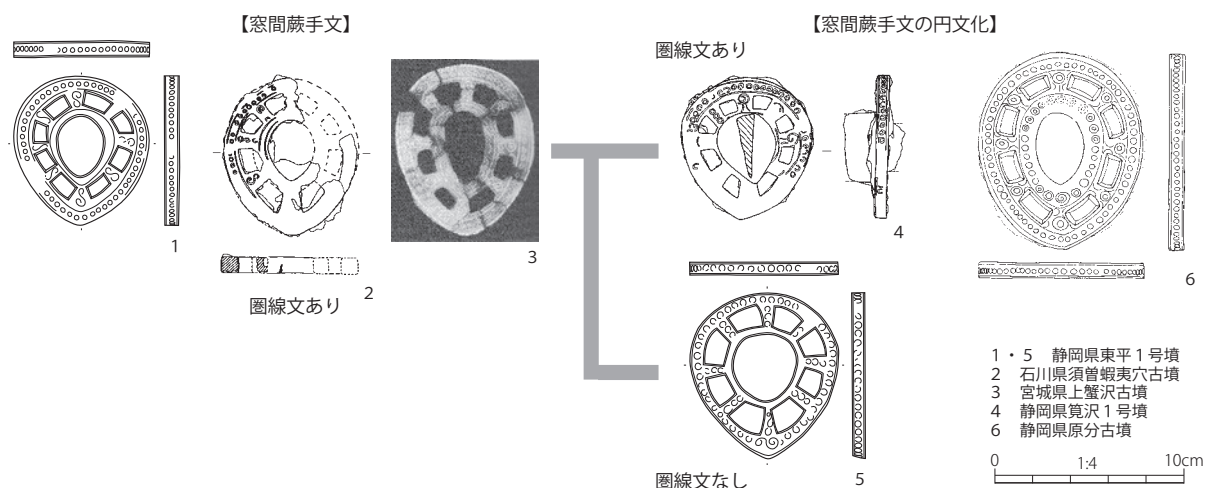
第74図 大刀出土状況



第75図 鉄製無象嵌円頭柄頭の類例と拵え



第76図 東平1号墳出土大刀の拵え



第77図 連珠文象嵌鐙の類例と変遷

(2) 大刀の帰属年代

象嵌装鐙付大刀 筆者は長泉町原分古墳出土象嵌鐙を位置づける際に、面・耳に圈線連珠文（円文）を施す象嵌鐙の検討を行った。八窓鐙は古い様相を示すと考えられるが、相伴する柄頭の文様などから八窓鐙でも圈線連珠文象嵌八窓鐙は古墳時代終末期前半、7世紀前半～中葉に位置づけられることを明らかにした（大谷 2008a）。東平1号墳出土の2例は、圈線連珠文・連珠文であるが、面の窓間の文様がS字（蕨手）文のもの（象嵌装大刀A）と円文のもの（象嵌装大刀B）がある。前者は須賀川古墳例（能登島町教委 2001）が、後者は原分古墳例（静岡県埋文研 2008）が類似しており（第77図）、時期差はそれほどないものの両者の柄頭の文様から、須賀川古墳例から原分古墳例へ変化したことが明らかである（大谷 2008a）。これにより圈線連珠文八窓鐙は東平1号墳象嵌装大刀A（窓間蕨手）の方が象嵌装大刀B（窓間円文）より古く位置づけられる。両者共に7世紀前半～中ごろに位置づけられる。一人の被葬者が2振を別々の機会に入手したのか、二人の被葬者が別々に入手したのかは明らかにできない。

八窓鐙付無象嵌円頭大刀 醍醐1号墳例は7世紀前半、下触牛伏1号墳は7世紀後半であることから、無象嵌円頭大刀が古墳時代終末期に存在したことは間違いないが、東平1号墳例の時期を特定するのは難しい。無象嵌八窓鐙は、西澤正晴氏の遠江・駿河の鐙の研究による有窓鐙B類（平面形が倒卵形で、

短軸の最大幅が長軸の中心付近にあるもの）に該当する（西澤 2002）。西澤氏によると有窓鐙B類は、TK209型式期に出現し、飛鳥Ⅲ併行期まで存在した可能性が高く、その主体は飛鳥Ⅰ～Ⅱ併行期と想定されている（西澤 2002）。

また、刀身の形態は臼杵勲氏による均等両関で、茎は中細茎であり、臼杵氏の均等両関一文字尻中細茎か均等両関栗尻中細茎に分類できる。茎尻が欠損しており、どちらか判断が難しいが、いずれも臼杵氏分類「IX」で、古墳時代終末期（7世紀以降）に位置づけられる（臼杵 1984）。つまり、八窓鐙付円頭大刀は刀身の特徴と八窓鐙から飛鳥Ⅰ期以降に位置づけられる。同じ場所に副葬された象嵌装鐙付大刀が飛鳥Ⅱ併行期に位置づけられる蓋然性が高く、後述するように馬具も飛鳥Ⅱ併行期に位置づけられることから、八窓鐙付円頭大刀も飛鳥Ⅱ併行期に位置づけるのが妥当と考える。

3 馬具の帰属年代

(1) 轡

ア 帯状吊金具付大型矩形立開環状鏡板付轡

大型矩形立開環状鏡板付轡（以下、環状鏡板付轡は円環轡とする）は通常金属製の吊金具は装着されないが、東平1号墳出土例は、金銅製で幅広の帯状吊金具で面繫の繫に装着される。古墳時代の轡の吊金具は吊脚まで一体で作られている場合が多いが、東平1号墳例は、方形帯金具に別造りの金銅製吊脚を鉤留めするものである。

第6表 帯状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	材質	断面	吊脚	連結	心轡	花卉	その他の馬具	文献
古凍 14 号墳第 2 土坑	埼玉県東松山市	—	—	土坑	金銅装	板状	別造	銜	なし	—	壺鍔他	1
古凍 14 号墳第 4 土坑	埼玉県東松山市	—	—	土坑	鉄製	板状	一体	銜	なし	—	鞍金具他	1
東平 1 号墳	静岡県富士市	円	13	横石	金銅製	コ字形	別造	銜	鉄製	●	壺鍔他	本書
上向嶋 2 号墳	愛知県豊橋市	円	16	横石	金銅製	コ字形	別造	銜	なし	●	鉸具造他	2
川子原横穴墓	島根県奥出雲町	—	—	横穴	鉄製	板状	一体	銜	なし	—		3

略記 墳形 土壌＝馬殉葬土壌か 円＝円墳 埋葬＝埋葬施設 横石＝横穴式石室 横穴＝横穴墓 材質＝帯金具の材質
吊脚＝吊金具と吊脚の製作方法 連結 轡・銜・引手の連結方法 銜＝銜介在型連結（大谷 2008b）
心轡＝横長心葉形鏡板付轡の有無 花卉＝棘付花卉形杏葉の有無

第7表 横長心葉形鏡板付轡出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	分類	材質	連結	轡	花卉	文献
成田 3 号墳	茨城県行方市	円	18	横石	I	鉄	遊環リベット留・銜介在	—	●	1
宮中野 99-1 号墳	茨城県鹿嶋市	—	—	土坑	II	鉄	遊環リベット留・銜介在	鍔轡	●	2
六孫王原古墳	千葉県市原市	後円	46	不明	II	金銅	遊環リベット留・銜介在	—	—	3
塚原出土	群馬県みなかみ町	—	—	—	—	金銅	（未確認）	—	—	4
御門 1 号墳	群馬県昭和村	円	11	横石	II	鉄	遊環リベット留・銜介在	双環式円板轡	●	5
若田 B 号墳	群馬県高崎市	円	14	横石	I	鉄	—	—	●	6
御崎古墳	山梨県笛吹市	古墳	—	横石	II	金銅	遊環リベット留・銜介在	—	●	7
東一本柳古墳	長野県佐久市	円	10+	横石	I	鉄	遊環リベット留・銜介在	—	●	8
御蔵上 3 号墳	静岡県長泉町	—	—	横石	II	金銅	遊環有？・銜介在？	—	●	9
東平 1 号墳	静岡県富士市	円	13	横石	I	鉄	遊環リベット留・銜介在	※ 1	●	本書
千人塚古墳	静岡県富士市	円	20	横石	I	鉄	遊環リベット留・銜介在	—	—	10
白砂ヶ谷 D 2 号墳	静岡県藤枝市	円	10	横石	—	鉄	遊環リベット留・銜介在	—	—	11

略記 墳形 円＝円墳 後円＝前方後円墳 埋葬＝埋葬施設 横石＝横穴式石室 花卉＝棘付花卉形杏葉の有無
※ 1 東平 1 号墳出土の轡は帯状吊金具付大型矩形立聞円環轡。

第8表 横長心葉形鏡板付轡と関連する透十字文心葉形鏡板付轡出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	材質	文様	連結	花卉杏葉	文献
しどめ塚古墳	群馬県高崎市	円	16.6	横石	鉄製	—	外接（8 字形遊環介在）	●	12
塚山古墳群	三重県伊勢市	古墳	—	—	金銅製	毛彫	外接（8 字形遊環介在）	—	13
坂本古墳	滋賀県大津市	古墳	—	—	金銅製	毛彫	外接（8 字形遊環介在）	—	5
伝香美町油良出土	兵庫県香美町	—	—	—	金銅製	毛彫	外接（8 字形遊環介在）	—	本書
古柳塚古墳	山梨県笛吹市	円	—	—	金銅装	透彫	外接（8 字形遊環介在）	—	14
仁田山ノ崎古墳	静岡県牧之原市	古墳	—	横石	鉄製	—	銜リベット留・銜介在	—	15
小畑 3 号墳	鳥取県岩美町	古墳	—	横石	鉄製	—	二重銜先環（交差式）	—	16

略記 墳形 円＝円墳 埋葬＝埋葬施設 横石＝横穴式石室 8 字形遊環＝8 字形銜留金具（神 2017）
花卉杏葉＝棘付花卉形杏葉の有無 銜リベット留・銜介在（第 6 図参照）
※仁田山ノ崎古墳例は楕円形鏡板付轡とされるが、大型矩形立聞で透十字文を有する鏡板付轡は心葉形であることが多いため、心葉形と判断した（註 7 参照）

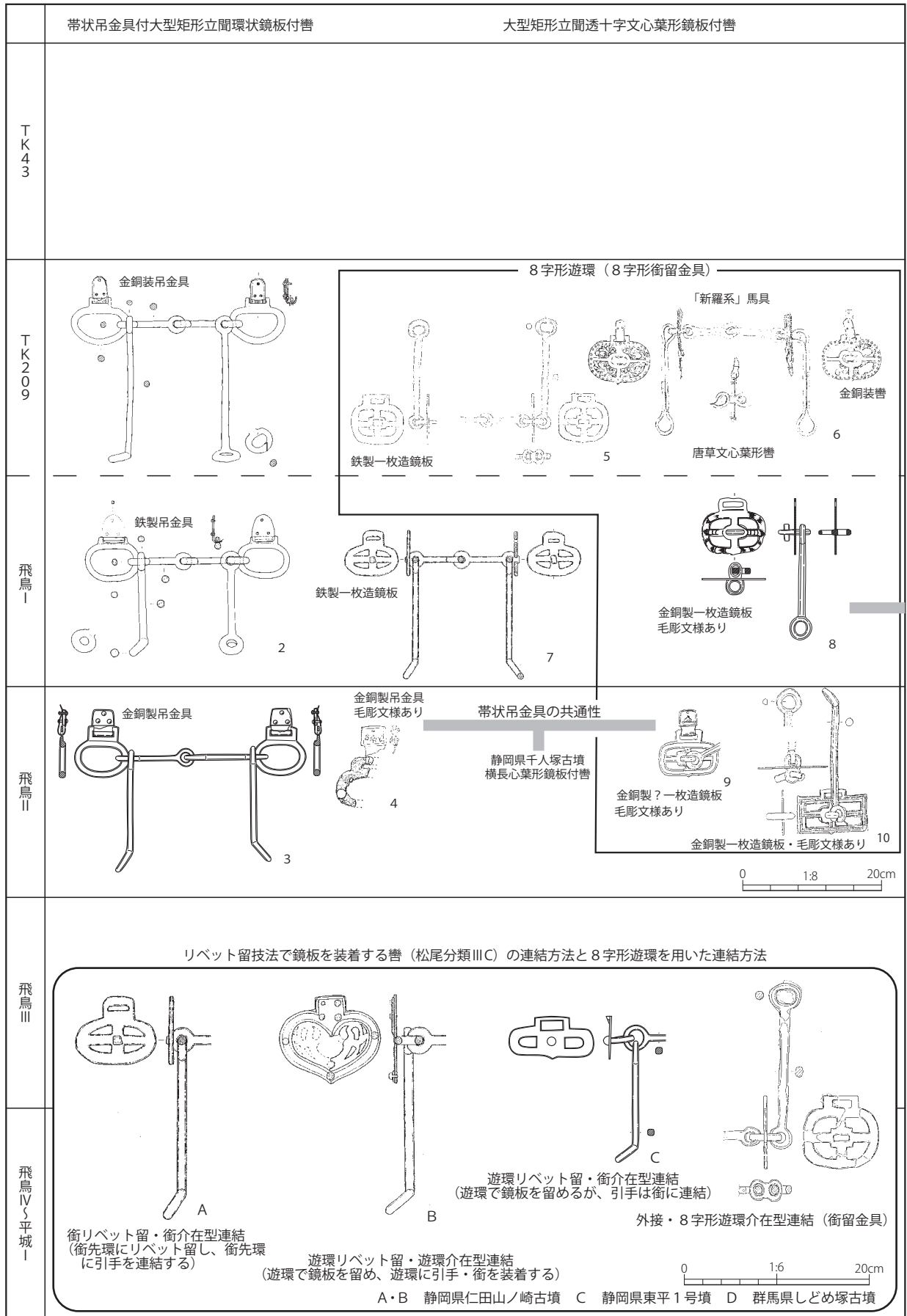
東平 1 号墳出土の帯状吊金具の類例は、埼玉県古凍 14 号墳第 2・4 土坑（馬殉葬土坑）などで確認できる（第 6 表）。また、上向嶋 2 号墳では円環轡 2 種類とともに東平 1 号墳と同様の吊金具が出土している。断定はできないが、棘付花卉形杏葉に伴うことが多い横長心葉形鏡板付轡は出土していないこと、2 つの円環轡のうちひとつは鉸具造立聞円環轡であり、吊金具は不必要であることから、東平 1 号墳と同様に大型矩形立聞円環轡に伴う可能性が高い。

大型矩形立聞円環轡は、岡安光彦氏により鏡板の大きさが大きなものから小さいものへ変化すること、TK217 型式期に高さ 7.2cm、幅 6.4cm 前後になることが指摘される（岡安 1984・1985）。それに従えば、古凍 14 号墳第 2 土坑出土例はそれよりも

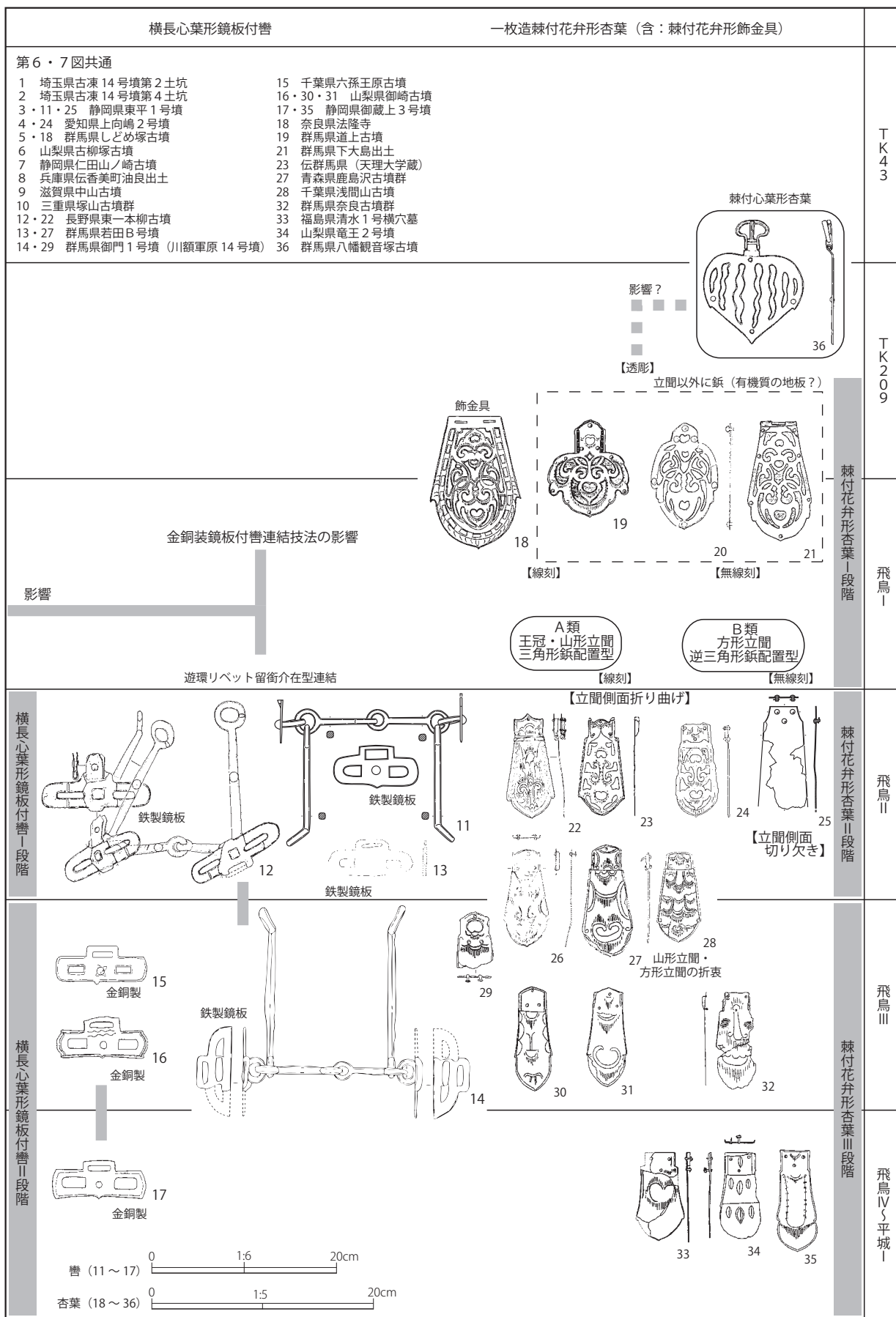
大きく、4 号土坑はほぼ同法量、東平 1 号墳や上向嶋 2 号墳例はそれよりも小さいことから、第 78 図に示したような変遷を想定できる。東平 1 号墳例は TK217 型式でも新しい時期、飛鳥Ⅱ期併行期に位置づけることができる。

イ 横長心葉形鏡板付轡

東平 1 号墳出土の横長心葉形鏡板付轡（以下、横長心葉形轡）は、鏡板が鉄製一枚造である。この轡は鏡板がハート形を押し潰したように扁平で横長の心葉形であること、立聞が大型矩形立聞であることが特徴である。また、銜・鏡板・引手の連結方法は、銜先環に遊環、引手を連結し、鏡板は遊環の先端に突起をつけて鏡板を通した後先端をかしめて留める（リベット留する）ものである。松尾充晶氏の分類によるⅢC 類^{（註 6）}に該当し、TK217 型式（飛鳥Ⅰ）



第78図 東平1号墳出土馬具の編年の位置づけ①（带状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡・横長心葉形鏡板付轡と関連する轡）



第79図 東平1号墳出土馬具の編年の位置づけ②（横長心葉形鏡板付轡・棘付花弁形杏葉）

以降に出現するとされる（松尾 1999）。

横長心葉形轡は、佐藤信孝氏の類例集成と分類研究により、第7表に示したように、東平1号墳を含めて12例が知られる（佐藤 2005）。この轡は連結方法が判明するものは、すべて東平1号墳と同様の連結方法を採用する、規格性の高い轡である。

横長心葉形轡の展開 横長心葉形轡は佐藤氏の集成と研究（佐藤 2005）や白井久美子氏の研究（白井 2002）を参考に分類すると、東一本柳古墳例や若田B号墳例のように心葉形の隅角が丸みを帯びるものと、六孫王原古墳・御蔵上3号墳のように長方形に近いもの、側面が御崎古墳のようにE字形に加工されるもの、御門1号墳のように鏡板の形状が心葉形から逸脱するものに区分できる。丸みを帯びるものをⅠ類、それ以外のものをⅡ類に区分する（第7表）。Ⅰ類は鉄製のみであり、Ⅱ類は金銅製のものが多い。Ⅰ類とⅡ類で材質・形状が異なることから、この時期に画期があった可能性がある。

東平1号墳は鏡板の肩が丸みを帯びているためⅠ類に区分できる。Ⅰ類はおおむね7世紀前半～中ごろに位置づけることが可能であり（横長心葉形鏡板付轡Ⅰ期）、Ⅱ類は7世紀中ごろ～8世紀初頭（横長心葉形鏡板付轡Ⅱ期）に位置づけられる。東平1号墳は7世紀前半～中ごろ、飛鳥Ⅱ併行期に位置づけたい。

横長心葉形轡の成立 横長心葉形轡は古墳時代終末期に新たに出現する轡とされる（内山 1996）。上述したようにこの轡は7世紀前半以降に位置づけられる可能性が高いが、板状一枚造である点、立聞が大型矩形である点が大部分の古墳時代後期末以降の板状鏡板付轡とは大きく異なっており、古墳時代後期からの系譜関係を探ることで、横長心葉形轡の成立について検討し、東平1号墳例の評価を試みたい。

横長心葉形轡の特徴は、下辺に突起があるものが多いことから心葉形であることが意識されている、立聞は大型矩形立聞である、初期のものは鉄製である、轡の連結方法が遊環リベット留・銜介在型連結である。

古墳時代後期後半の鏡板付轡は、「新羅系」（千賀 2003）とされる、奈良県藤ノ木古墳例（榎考研 1990・1995）や静岡県賤機山古墳例（東海古墳文化

研 2006）のような唐草文心葉形鏡板付轡や伝名古屋市出土（熱田神宮蔵、東海古墳文化研 2006）の透十字文心葉形鏡板付轡（〇〇鏡板付轡の場合は、〇〇轡とする）以外は、小型矩形立聞であることが多い（「非新羅系」）。また、6世紀末以降鉾留立聞が採用されることが一般的になる。そのような状況の中、「新羅系」馬具の特徴である大型矩形立聞を横長心葉形轡が古墳時代終末期に至っても保持することは大きな特徴である。そこで大型矩形立聞の鏡板付轡で鉄製一枚造のものを探ると、第8表に示したように、しどめ塚古墳の透十字文心葉形轡、仁田山ノ崎古墳の心葉形轡^{（註7）}、小畑3号墳の透十字文心葉形轡がある。いずれも透十字文であることが特徴である。このうちしどめ塚古墳例は、8字形遊環（大谷 2014、8字形銜留金具＝神 2017）を用いて鏡板を留めるもの（第78図参照）で、轡の連結方法として非常に特殊なものである。この事例はしどめ塚古墳以外に、古柳塚古墳の金銅装唐草文心葉形轡、伝香美町油良出土・塚山古墳群の一枚造の透十字文心葉形轡があり、中山古墳例もその可能性が高い（第8表、第78図）。8字形遊環も大型矩形立聞透十字文心葉形轡に伴うもので、金銅装のものが存在することも特徴である。この8字形遊環をもつ透十字文心葉形轡をはじめとする透十字文心葉形轡は、引手の特徴や鏡板の平面的な特徴などから、TK209～飛鳥Ⅰ併行期に古柳塚古墳例、しどめ塚古墳例、小畑3号墳例で、続く飛鳥Ⅰに肩が丸みのある仁田山ノ崎古墳例、伝香美町油良出土例、飛鳥Ⅱに平面形が長方形に近い中山古墳例や角がしっかりした長方形の塚山古墳群例を位置づけることができる（第78図）。

横長心葉形轡のⅠ段階のものが丸みを帯びる傾向にあるものの、長方形に近い扁平な心葉形に変化していることを考慮すると、中山古墳例・塚山古墳群例と同時期と考えることができる（第78図）。

なお、中山古墳例は毛彫文様のある带状吊金具を採用しているが、上述したように横長心葉形轡の千人塚古墳例も同様の带状吊金具を採用しており、時期的にも形態的にも共通性が窺える。したがって、長方形に近い心葉形であること、一枚造、大型矩形立聞である特徴は、「新羅系」馬具の系譜を引く透

第9表 棘付花弁形杏葉出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	心嚮	数	立聞	飾金具コ字形				飾金具板状				時期	文献
								方	円	透方	長	円	透長	透方			
道上古墳	群馬県前橋市	円	16	横石		1	山三	●	●	—	—	—	—	—	—	I	9
八幡下大島出土	群馬県高崎市	古墳	—	—		1	蝶番	—	—	—	—	—	—	—	—	I	9
しどめ塚古墳	群馬県高崎市	円	16.6	横石		3+	半円三	—	●	—	—	—	—	—	—	I	12
法隆寺献納宝物	奈良県斑鳩町	寺院	—	—		1	蝶番	—	—	—	—	—	—	—	—	I	5
鹿島沢古墳群	青森県八戸市	古墳	—	—		2	A類	●	●	—	—	●	—	●	—	II	5・17
成田3号墳	茨城県行方市	円	18	横石	●	2	A類	●	●	—	—	●	—	—	—	II	1
奈良古墳群	群馬県沼田市	古墳	—	—		1	B類	●	●	—	—	●	—	—	—	II	5
若田B号墳	群馬県高崎市	円	14	横石	●	4	A類	●	●	—	—	●	—	—	—	II	6
伝群馬県出土	伝群馬県	—	—	—		4	A類	—	—	—	—	—	—	—	—	II	5
浅間山古墳	千葉県栄町	後円	70	横石		2	折衷	●	●	—	—	—	—	—	—	II	20
東一本柳古墳	長野県佐久市	円	10+	横石	●	4	A類	●	●	●	—	●	—	—	—	II	8
東平1号墳	静岡県富士市	円	●	横石	●	2	B類	●	—	—	—	●	—	—	—	II	本書
上向嶋2号墳	愛知県豊橋市	円	16	横石		4	B類	●	●	—	—	●	—	●	—	II	23
清水1号横穴墓	福島県いわき市	—	—	横穴		2	B類	—	—	—	—	—	—	—	—	III	5・17
柴崎II遺跡64号	茨城県つくば市	堅穴	—	—		1	B類	—	—	—	—	—	—	—	—	III	5
宮中野99-1号墳	茨城県鹿嶋市	—	—	土坑	●	1	A類	—	—	—	—	—	—	—	—	III	2
奈良古墳群	群馬県沼田市	古墳	—	—		2	B類	—	—	—	—	—	—	—	—	III	5
御門1号墳	群馬県昭和村	円	11	横石	●	1	A類	●	—	●	—	—	●	—	—	III?	5
立野12号墳	埼玉県熊谷市	円	21.5	横石		2	B類	—	—	—	—	—	—	—	—	III	19
北園護台遺跡37号	千葉県成田市	堅穴	—	—		1	B類	—	—	—	—	—	—	—	—	III	5
園護台遺跡79号	千葉県成田市	堅穴	—	—		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III	5
竜王2号墳	山梨県甲斐市	円?	14	横石		1	B類	●	●	—	—	—	●	—	—	III	21
御崎古墳	山梨県笛吹市	古墳	—	—	●	2	A類	●	●	—	—	—	●	—	—	III	7
						4	A類	—	—	—	—	—	—	—	—	III	
御蔵上3号墳	静岡県長泉町	古墳	—	横石	●	4	B類	●	●	—	—	—	●	—	—	III	9・22
西本6号遺跡	広島県東広島市	—	—	—		1	B類	—	—	—	—	—	—	—	—	III	5
弁財天遺跡61号	茨城県土浦市	堅穴	—	—		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
鳥屋八幡2号墳	宮城県大和町	円	14	横石		1+	未確認	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9
口明塚南古墳	愛知県豊橋市	円	23	横石		1	B類	—	—	—	—	—	—	—	—	—	24
参考：塚山古墳群	三重県伊勢市	—	—	—		—	—	●	—	—	—	—	●	●	—	II	13

略記 遺跡名「号」のあとに「墳」がつかないものは堅穴建物を表す。墳形 堅穴＝堅穴建物 後円＝前方後円墳 円＝円墳
埋葬＝埋葬施設 横石＝横穴式石室 横穴＝横穴墓、宮中野99-1号墳は周溝内土坑（馬殉葬土坑か）
心嚮＝横長心葉形鏡板付轡の有無 数＝杏葉の点数 立聞 A類＝王冠山形立聞三角形鉾配置型 B類＝方形立聞逆三角形鉾配置型
立聞 折衷＝方形立聞三角形鉾配置
飾金具コ字形＝飾金具横断面コ字形 飾金具板状＝飾金具横断面板状 方＝方形 長＝長方形 円＝円形

十字文心葉形轡製作者集団が関与した可能性が高い。

一方で、上述した心葉形轡が外接である点が横長心葉形轡と異なり、唯一仁田山ノ崎古墳例のみが銜先環に鏡板をリベット留めし、その銜先環に引手を装着する銜リベット留・銜介在型連結を採用している（第78図下段）。ただし、この方式も横長心葉形轡の遊環リベット留・銜介在型連結とは異なる。遊環リベット留・銜介在型は、花形鏡板付轡、心葉形鏡板付轡など板状鏡板付轡で採用されており、それらの影響が窺える。

横長心葉形轡は、大型矩形立聞、一枚造である点は、「新羅系」馬具の系譜を引く大型矩形立聞透十字文心葉形轡の影響を受けつつ、古墳時代後期から続く花形・心葉形の金銅装鏡板付轡の連結方法の影響も受けて生産された可能性が高い。その工房は透十字文心葉形鏡板付轡や後述するように透彫や毛彫文様のある棘付花弁形杏葉製作工人集団と関連する

工人集団であった可能性が高い。

(2) 棘付花弁形杏葉

東平1号墳からは金銅製一枚造で無文の棘付花弁形杏葉と推測する金具が出土した。棘付花弁形杏葉は文様の表現方法が透彫か線刻かにより大きく区分され、透彫から線刻へ変遷することが明らかにされ、後者は文様の変化により時期的な位置づけが行われている（田中1980、白井2002、森田2005、高松2011ほか）。ただし、東平1号墳例は無文であり、文様の特徴により時期を決めることは難しいため、棘付花弁形杏葉の集成（第9表）を行ったうえで、諸特徴を検討し、共伴する飾金具・帯金具の特徴を含めて東平1号墳例を位置づけたい。

棘付花弁形杏葉は、いずれの研究者も、透彫であるしどめ塚古墳例や道上古墳例を古く位置付ける^(註8)。これに従い、透彫の棘付花弁形杏葉をI段階とする。棘付花弁形杏葉I段階は、しどめ塚古墳例がTK209

～飛鳥Ⅰ併行期に、法隆寺例が610年前後とされる（田中1980）ことから、TK209～飛鳥Ⅰ併行期としておきたい。続くⅡ段階、Ⅲ段階は線刻で文様が表現される段階で、多くの研究者同様、立聞^{（註9）}の形状と鉾配置により王冠形・山形立聞で三角形に鉾を配置するA類（王冠・山形立聞三角形鉾配置型）と、立聞の先端が直線で裁断される方形立聞で、逆三角形に鉾が配置されるB類（方形立聞逆三角形鉾配置型）に区分する。蝶番立聞の東一本柳古墳例は蝶番が王冠形であることからA類に区分する。

Ⅱ段階は、おおむね花卉部の文様が大きく3段以上に施文しているものを位置づける（高松2011）。透彫を線刻で表現した伝群馬県出土例（A類）や上向嶋2号墳例（B類）や、蝶番立聞で三葉文を毛彫りで表現する東一本柳古墳例（A類）をⅡ段階でも古く、三葉文が崩れる鹿島沢古墳群例（A類）や若田B号墳例（A類）を新しい段階に位置づける（白井2002、高松2011、田中1980、森田2005ほか）。浅間山古墳例は方形立聞であるが三角形鉾配置でありA・B類の折衷である（高松2011）。A・B類は立聞の形状や鉾配置は異なるものの文様が類似することから近い工房で生産された可能性が高い（高松2011）^{（註10）}。Ⅱ段階は、飛鳥Ⅱ併行期に位置づけられ、7世紀前半～中ごろとする。

Ⅲ段階は、花卉部の文様が1～2段のものや、三葉文とは異なる葉文が採用されたり、心葉文（猪目文）のみのものを位置づける。竜王2号墳例（B類）や御蔵上3号墳例（B類）から、Ⅲ段階は7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられる。

それでは無文の東平1号墳はどの段階に位置づけることができるか。透彫が施されないことからⅡ段階以降に位置づけられる。立聞は方形立聞逆三角形鉾配置であり、B類に位置づけられる。残存長は約9cmであり、復原される大きさは10cmを超える。大きさによる分類を行った高松氏の検討では、高松氏のⅠ期（高松2011）＝筆者のⅡ段階の大きさとなる。

立聞の特徴をみると、棘付花卉形杏葉のⅡ・Ⅲ段階の立聞は側面が折り曲げられ、横断面がコ字形であるのに対し、東平1号墳例は立聞側面が切り欠きされ平板（一文字）である。この特徴はⅠ段階に分

類した道上古墳例やしどめ塚古墳例と共通する。ただし、透彫ではないこと、Ⅰ段階の特徴である立聞以外に鉾を打つという特徴がないこと、形状はⅡ期以降のものと同形と推断できることから、Ⅰ段階に位置づけることは難しい。よって、Ⅱ段階でも、古い時期に位置づけたい。

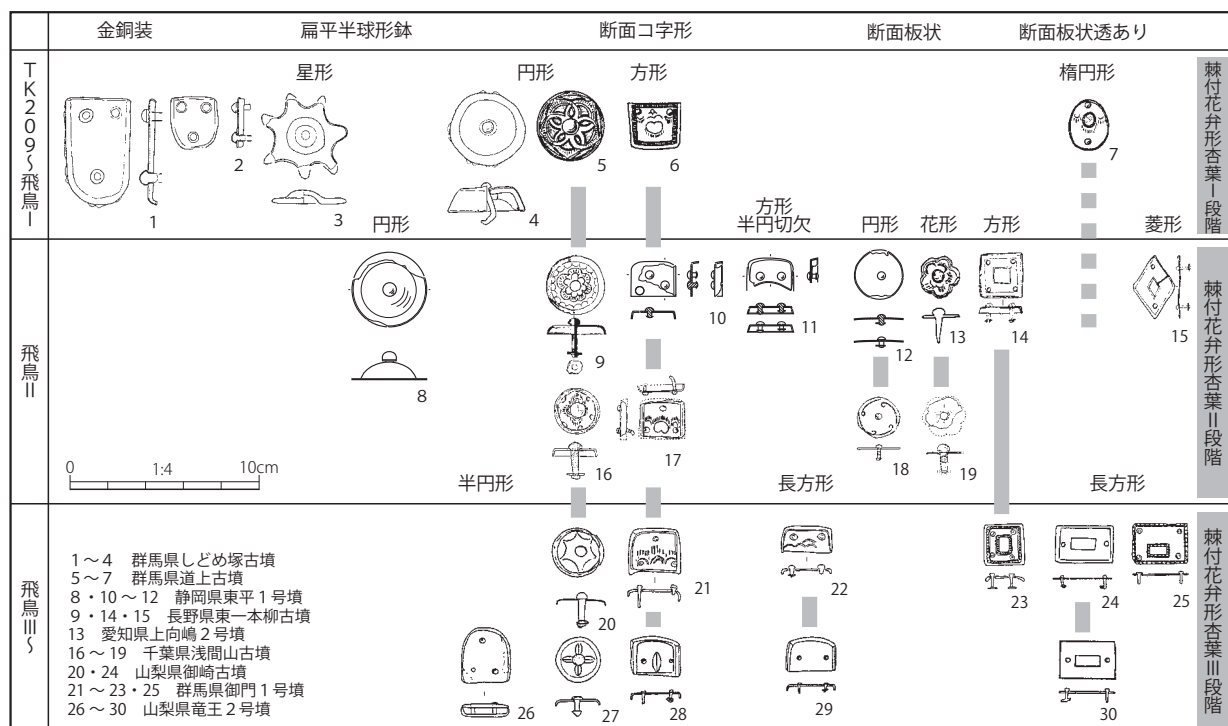
想像をたくましくすれば、線刻文様を取り入れられ、定形的な棘付花卉形杏葉が成立する前の試行段階の製品とできようか。また、横長心葉形轡も上述したように横長心葉形轡の初現的な製品の可能性があり、東平1号墳には古墳時代終末期に新たに創出された馬具が最初に配布された可能性もある。

棘付花卉形杏葉に伴う飾金具 棘付花卉形杏葉には、第80図に示したような飾金具（辻金具を含む）が共伴することが多い。それらの飾金具は断面コ字形で方形・円形の全時期を通じて確認されるものがある一方で、Ⅰ段階には半球形ものが、Ⅱ段階には円形板状のもの、Ⅲ段階には板状長方形で透かしのあるものが確認できる（第80図）。特に長方形で透かしのあるものはこれまでの研究により（岡安1987、白井2002ほか）、新しい傾向にあることが明らかであったが、これ以外にも各段階に特徴的な形態があることがわかった。

東平1号墳例は棘付花卉形杏葉Ⅰ段階にみられる半球形飾金具がある一方でⅡ段階に特徴的な板状円形のものがあることから杏葉と同じくⅡ段階でも古い段階の組合せであるといえ、飾金具の組合せからも棘付花卉形杏葉Ⅱ段階の初現的な位置づけをすることができる。

棘付花卉形杏葉と横長心葉形轡の組合せ 横長心葉形轡は、12例中8例が棘付花卉形杏葉と共伴する（第8表）ため、組合関係にあったことが想定される。東平1号墳でも共伴するが、円環轡も出土しているため同一の馬具の組合せであったのか検証したい。

棘付花卉形杏葉Ⅰ段階では、横長心葉形轡が出現していないが、しどめ塚古墳例は鉄製透十字文心葉形轡と組合関係にあると考える。また、Ⅱ段階の上向嶋2号墳例は横長心葉形轡は出土しておらず、大型矩形立聞円環轡と鉸具造立聞円環轡である。鉸具造立聞円環轡は、棘付花卉形杏葉と共伴している事



第 80 図 東平 1 号墳出土馬具の編年の位置づけ③（飾金具）

例がほとんどなく、それらは当初から組合関係にはないことが想定される。上向嶋 2 号墳では横長心葉形杏葉が発掘調査前に失われた可能性があるが、その場合組合関係にあると想定される金銅製吊金具は 2 点出土しており、轡のみが失われ、吊金具だけが残ったとは想定しにくい。そのため筆者は第 78 図に示した通り、東平 1 号墳のように大型矩形立開円環轡に带状吊金具が伴うと想定した。この想定が正しいければ、金銅製带状吊金具付であり、吊金具の材質は棘付花卉形杏葉に近いことから、東平 1 号墳例と上向嶋 2 号墳例は带状吊金具付大型矩形立開円環轡と棘付花卉形杏葉が組合関係にあった可能性が高い。

一方で、東一本柳古墳では横長心葉形轡と棘付花卉形杏葉が組合関係にある。また、Ⅱ段階でも新しい若田 B 号墳、成田 3 号墳ではそれらが組合関係にある。若田 B 号墳の轡と同形状の千人塚古墳例では、金銅製带状吊金具を伴う。金銅製带状吊金具が横長心葉形轡に取り入れられるⅡ段階で、組合せが増加する。Ⅲ段階以降、御崎古墳、御蔵上 3 号墳などで組合せとなる。

したがって、棘付花卉形杏葉と横長心葉形轡は当

初から組合関係にはなく、最初は横長心葉形轡につながる大型矩形立開透十字文心葉形轡などと組み合わされていた（この段階で鉄製鏡板付轡と金銅製棘付花卉形杏葉という組合せは成立している）。Ⅱ段階には、東一本柳古墳のように横長心葉形轡と棘付花卉形杏葉の組合せが成立しているが、大型矩形立開円環轡と組合されるものもあり、一定していない。Ⅱ段階の新しい段階の若田 B 号墳、成田 3 号墳やⅢ段階の御崎古墳、御蔵上 3 号墳などで確認されることから、Ⅱ段階の新しい時期以降時期が降るにつれてその組合せが普及したと考える。

轡と杏葉の組合せからみても、東平 1 号墳の棘付花卉形杏葉が線刻のない带状吊金具付大型矩形立開円環轡と組み合わせられた可能性が高いことから東平 1 号墳例は線刻のある定形的なもの（Ⅱ段階）の成立期直前か成立期の製品として位置づけられる。

(3) 壺鍔

東平 1 号墳では、壺部が銅製で、軸部と踏込（舌）が鉄製の壺鍔が出土した。

金属製壺鍔の分類 壺鍔は壺部が有機質と金属製の 2 種類があり、前者は金属の飾金具・吊金具がつ

第 10 表 壺鍙出土例

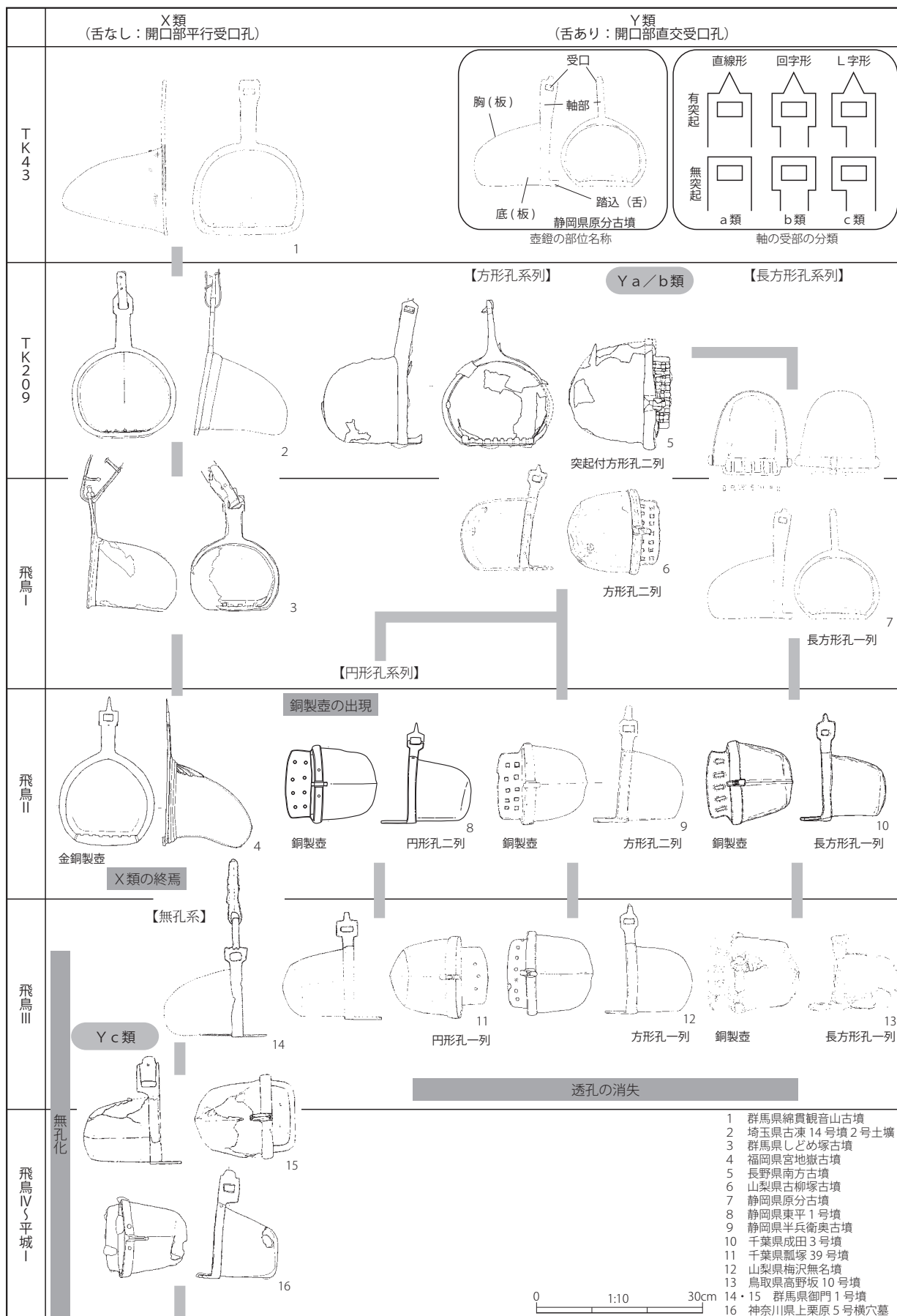
遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	材質	分類	孔	舌	孔の形状	受口形状	文献
足利公園麓古墳	栃木県足利市	古墳	—	—	鉄	X	平行	無	—	突 b	1
藤井 38 号墳	栃木県壬生町	円	22	横石	鉄	X	平行	無	—	突 b	2
東浦古墳	栃木県真岡市	円？	—	横石？	鉄	X	平行	無	—	突 b？	3
水泉寺 6 号墳	群馬県渋川市	円	10	横石	鉄	X	平行	無	—	無突 b	5
しどめ塚古墳	群馬県高崎市	円	16.6	横石	鉄	X	平行	無	—	突 b	4
前山古墳	群馬県高崎市	後円	47+	横石	鉄	X	平行	無	—	突 b	5・6
綿貫観音山古墳	群馬県高崎市	後円	94	横石	鉄	X	平行	無	—	無突 b	7
伝美久里出土	群馬県藤岡市	—	—	—	鉄	X	平行	無	—	突 b	5・8
伝甘楽町金井	群馬県甘楽町	—	—	—	鉄	X	平行	無	—	突 b	8
古凍 14 号墳 2 号土坑	埼玉県東松山市	—	—	土坑	鉄	X	平行	無	—	突 b	9
松面古墳	千葉県木更津市	方	44	横石	鉄	X	平行	無	—	不明	10
伝常楽寺上塚出土	長野県	—	—	—	鉄	X	平行	無	—	突 b	11
藤明古墳	静岡県沼津市	古墳	—	横石	鉄	X	平行	無	—	突 b	12
宮原 2 号墳	静岡県沼津市	古墳	—	横石	鉄	X	平行	無	—	突 b	12
石州府 1 号墳	鳥取県米子市	円	40	横石	鉄	X	平行	無	無	突 b	13
宮地嶽古墳	福岡県福津市	円	38	横石	金銅	X	平行	無	—	突 a	14
合戦原 53 号横穴墓	宮城県山元町	—	—	横穴	鉄	Y	直交	有	無	突 L 字形	15
名古谷新 2 号横穴墓	福島県楡葉町	—	—	横穴	鉄	Y	直交	有	—	—	16
成田 3 号墳	茨城県行方市	円	18	横石	金銅	Y	直交	有	長 1	突回字	17
前林古墳	茨城県古川市	古墳？	—	—	鉄	Y？	直交	有	不明	L 字？	1
伝茨城県出土	伝茨城県	—	—	—	鉄	Y	直交	有	方 2？	突回字？	11
御門 1 号墳	群馬県昭和村	円	11	横石	鉄	Y	直交	有	無	突回字	18
奈良カ号墳	群馬県沼田市	円	—	横石	鉄	Y	直交	有	円 1	突回字	5
伝倉賀野出土	群馬県高崎市	—	—	—	鉄	Y	直交	有	長 1	突 b	19
下佐野 12 号墳	群馬県高崎市	古墳	—	—	鉄	Y	直交	有	方 2	突 a	20
諏訪神社古墳	群馬県藤岡市	後円	57	横石	鉄	Y	直交	有	不明	突 b	21
向吹張古墳	群馬県前橋市	円	—	横石？	金銅	Y	直交	有	長 1	突 b	5・19
瓢塚 39 号墳	千葉県成田市	方	14	土坑	鉄	Y	直交	有	円 1	突 b	22
天王・船塚 4 号墳	千葉県成田市	方	42	横石	鉄	Y	直交	有	方 2	突 b	22
上栗原 5 号横穴墓	神奈川県伊勢原市	—	—	横穴	鉄	Y	直交	有	無	突 c	23
さんごじ塚古墳	山梨県笛吹市	—	—	—	鉄	Y	直交	有	方 1	—	24
梅沢無名墳	山梨県笛吹市	—	—	横石	鉄	Y	直交	有	方 1	突 b	25
古柳塚古墳	山梨県笛吹市	古墳	—	横石？	鉄	Y	直交	有	方 2	突 b	26
伝右佐口出土	山梨県甲府市	—	—	—	鉄	Y	直交	有	—	突 b	25
コウモリ塚古墳	長野県岡谷市	円	15	横石	鉄	Y	直交	有	無	突 c	27
南方古墳	長野県松本市	古墳	—	横石	鉄	Y	直交	有	方 2	突 a	28
原分古墳	静岡県長泉町	円	18	—	鉄	Y	直交	有	長 1	突 a	29
東平 1 号墳	静岡県富士市	円	13	横石	銅	Y	直交	有	円 2	突 b	本書
半兵衛奥古墳	静岡県静岡市	古墳	—	横石	銅	Y	直交	有	方 2	突 b	30
高野坂 10 号墳	鳥取県岩美町	八角墳	12	横石	銅	Y	直交	有	長 1	突 b？	31
糠塚横穴墓群	山口県長門市	—	—	横穴	銅	Y	直交	有	無	突 c	32
西都原地下式横穴墓	宮崎県西都市	—	—	地下	銅	Y	直交	有	無	突 c？	33
伝新岩里出土	韓国論山市	—	—	—	鉄	Y	直交	有	無	無突 a	34
馬老山城	韓国光陽市	—	—	—	鉄	Y	直交	有	格子	無突 a	35
馬老山城	韓国光陽市	—	—	—	鉄	Y	直交	有	格子	無突 a	36
馬老山城	韓国光陽市	—	—	—	鉄	Y	直交	有	格子	無突 a	37
西大須賀横穴墓群	千葉県成田市	—	—	横穴墓	有機質	Z	直交	無？	—	突 b	10
下土狩西 1 号墳	静岡県長泉町	円	20+	横石	有機質	Z	直交	無？	—	無突 b	12
藤沢狄森古墳群	岩手県矢巾町	—	—	—	鉄	(未確認)	—	—	—	—	36
玉造古墳	千葉県多古町	古墳	—	—	金銅製	(未確認)	—	—	—	—	37

略記 墳形 円＝円墳 後円＝前方後円墳 方＝方墳 埋葬＝埋葬施設 横石＝横穴式石室 横穴＝横穴墓 地下＝地下式横穴墓
分類 X＝X 類（開口部に平行する受口で踏込の舌なし） Y＝Y 類（開口部に直交する受口で舌あり） Z＝Z 類（壺部有機質）
孔の形状＝踏込舌に穿孔された孔の形状 長 1＝長方形孔 1 列 方 1・2＝方形孔 1・2 列
円 1・2＝円形孔 1・2 列 無＝孔なし
格子＝格子刻み 受口の形状 無突／突 a＝無突起／有突起 a 類 無突・突 b＝無突起／有突起 b 類
無突／突 c＝無突起／有突起 c 類 （第 81 図参照）

く金属装のものと金属製金具がない木製のものが存在する。一方金属製のものは金銅製・銅製と鉄製がある。

東平 1 号墳で出土している金属製壺鍙は、斎藤弘氏が集成と分析を行い、A（開口部平行の受口）

と A・B・C（開口部直交の受口）に区分し、A・A（軸部回字形）から B（兵庫鎖付）・C（軸部 L 字形）へ変遷したことを明らかにした（斎藤 1985）。ただし、A と A という区分は当初から型式分類に時期差が含まれており、さらに受部の形状と吊金具の有



第81図 東平1号墳出土馬具の編年の位置づけ④（金属製壺鍔）

無による分類基準が混在するなど課題が多い。ここでは鈴木一有氏による壺鐙の集成（鈴木 2008）を基礎に新規に確認したものを追加し（第 10 表）、それらを斎藤弘氏の分類視点を援用しながら、下記の通りに分類する。金属製壺鐙は軸部受口の方向が開口部に平行するものと直交するものがあり（斎藤 1985）、前者は踏込（以下、舌とする）を伴わず、後者は舌を伴うことから、前者をX類、後者をY類とする（第 81 図）。なお、有機質の壺であるが金属製壺鐙と同様の軸部の特徴をもつ下土狩西 1 号墳例などをZ類とする。

壺鐙は軸部受口の形状から頂部に突起があるもの（有突起）とないもの（無突起）に大きく区分でき、受口の形状から、a 類＝軸部が直線的なもの、b 類＝軸部と受口の間に段差があり、回字形のもの、c 類＝軸部と受口の間に段差があるが、軸部からL字形に曲がるものがある（第 81 図）。また、滑り止めに突起や透孔が施されるが、X類は突起のみ、Y類は突起付方形孔、方形孔、円形孔、長方形孔、無孔がある。

金属製壺鐙の編年 金属製壺鐙は朝鮮半島でも出土しているが、最も古く位置づけられるのはX類の綿貫観音山古墳例である。X類は古凍 14 号墳第 2 土坑例やしどめ塚古墳例のようにTK209 型式～飛鳥Ⅰ併行期のものが多く、宮地嶽古墳のように飛鳥Ⅱ段階のものがあるが、飛鳥Ⅲ以降に降るものは確認できないため、飛鳥Ⅱ併行期で金属製壺鐙X類は終焉した可能性が高い。

一方、東平 1 号墳例はY b 類に位置づけられるが、Y 類は、X 類よりも一段階遅れてTK209 型式にY a 類が出現し、Y c 類が 8 世紀以降まで継続する。東平 1 号墳例は、受口が回字形で、踏込の舌に円形孔を二列施すが、これまでの金属製壺鐙の編年では、細かい編年的位置づけが難しいため、検討を加えない。

Y 類のうち、舌の滑り止めがX類に確認できる突起があり、突起付方形孔の南方古墳例や下佐野 12 号墳例が最も古く、TK209 型式併行期に位置づけられる。つづいて、TK209 ～飛鳥Ⅰ併行期に滑り止めの突起が失われ、方形孔のみとなる古柳塚古墳例が出現し、長方形孔をもつ原分古墳例が創出さ

れる^{（註 11）}。その後、飛鳥Ⅱ併行期に舌に長方形孔、方形孔、円形孔を穿つものの 3 者が確認できる。また、この段階に銅製壺が出現し鉄製と併存する。X 類でも金銅装の宮地嶽古墳例が同時期に確認できるため、材質の多様化はこの段階にあった可能性が高く、以後銅製・鉄製が奈良時代まで共存する。

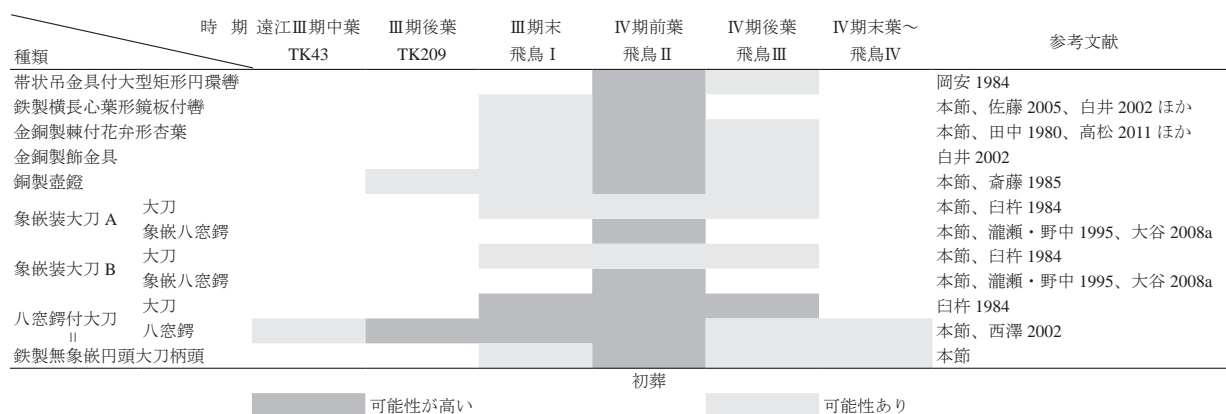
飛鳥Ⅲ併行期に斎藤弘氏の研究（斎藤 1985）により後出することが明らかなL字形受部のY c 類が出現する。Y c 類が無孔であること、古く位置づけられる踏込の有突起のものが方形孔二列であることから、穿孔のあるものは二列から一列へ、孔数が多いものから少ないものへ変化し、最終的に無孔化することがわかる。この段階ではY b 類でも方形孔・円形孔一列、長方形孔一列で透かし孔が少ない有孔のものと、無孔のものが並存する。また、御門 1 号墳ではY b ・ Y c 類が共伴しており^{（註 12）}、Y b 類とY c 類がこの段階では併存する。飛鳥Ⅳ併行期以降はY b 類はなく、Y c 類のみとなる。

なお、受口の形態では、直線的なY a 類に突起付のもの（南方古墳例・下佐野古墳例）や古手の長方形孔（原分古墳例）があり、頸部が長いものが多い（斎藤 1985）ため、日本列島ではY a 類がY b 類に先行する^{（註 13）}。

東平 1 号墳の壺鐙の位置づけ 東平 1 号墳例は円形孔二列であり、他の金属製壺鐙の時期的位置づけ（第 81 図）により、方形孔二列配置で孔数がほぼ同様の半兵衛奥古墳と同時期、飛鳥Ⅱ併行期に位置づける。円形孔系列 3 例では最も古く位置づけられるもので、東平 1 号墳以外の瓢塚 39 号墳例（一列 3 孔）と奈良古墳群出土例（一列 2 孔）は飛鳥Ⅲ以降に位置づける。銅製が出現することも考慮すると、東平 1 号墳例は銅製であり、この段階で当時の最先端を行く銅製の壺鐙と評価できる。

（4）大刀と馬具の編年的位置

ここまでに、個々の出土遺物について編年的位置づけを中心に分析を行った。そのうちそれぞれの遺物の時期を取りまとめたのが第 82 図である。無象嵌八窓鏝付円頭大刀、金銅製棘付花卉形杏葉など若干遡る可能性があるものも確認できるが、大刀・馬具は飛鳥Ⅱ併行期に位置づけることができる。



第 82 図 副葬された大刀と馬具の編年の位置からみた東平 1 号墳の埋葬時期

大刀は象嵌装鏝付大刀 2 振、鉄製円頭大刀 1 振、馬具は轡が 2 組、壺鐙 1 組、棘付花卉形杏葉 1 組はほぼ同時期に位置づけられることから、象嵌鏝に若干の時期差があるが、一人の被葬者（初葬者）に副葬された可能性が高く、追葬者には大刀・馬具は全く副葬されなかった可能性が高い。

3 東平 1 号墳の被葬者像

(1) 大刀と馬具の分布

東平 1 号墳の大刀と馬具の編年の位置づけを探るのに多くの紙面を使いながら集成を提示し、個々の副葬品について先学の研究を援用して分類、編年の組み立てを行った。上述したとおり東平 1 号墳の大刀と馬具は飛鳥Ⅱ併行期、7 世紀前半から中ごろに位置づけられることが確認できた。ここでは、いくつかの副葬品の分布等から東平 1 号墳の被葬者像を検討したい。

象嵌装大刀の分布と特徴 東平 1 号墳からは 3 振大刀が出土しているが、象嵌八窓鏝付大刀と同様の象嵌装鏝のある大刀は、東平 1 号墳 (2 点)、原分古墳、寛沢 1 号墳 (川江 1992a) の静岡 (駿河) 4 例をはじめ、石川 1 例、宮城 1 例であり、東日本に点在する。

圈線連珠文象嵌鏝は、圈線 C 字文象嵌鏝と渦巻文象嵌鏝の文様が融合して 7 世紀前半代に創出された可能性が高く、象嵌装大刀生産工人集団再編によって文様の融合が起こった可能性が高い (大谷 2011)。したがって、古墳時代後期からの連続性と、別文様の融合が起こっていることから生産工房は王権近くにあったものが再編され、その生産品が配布された可能性が高い (大谷 2011)。

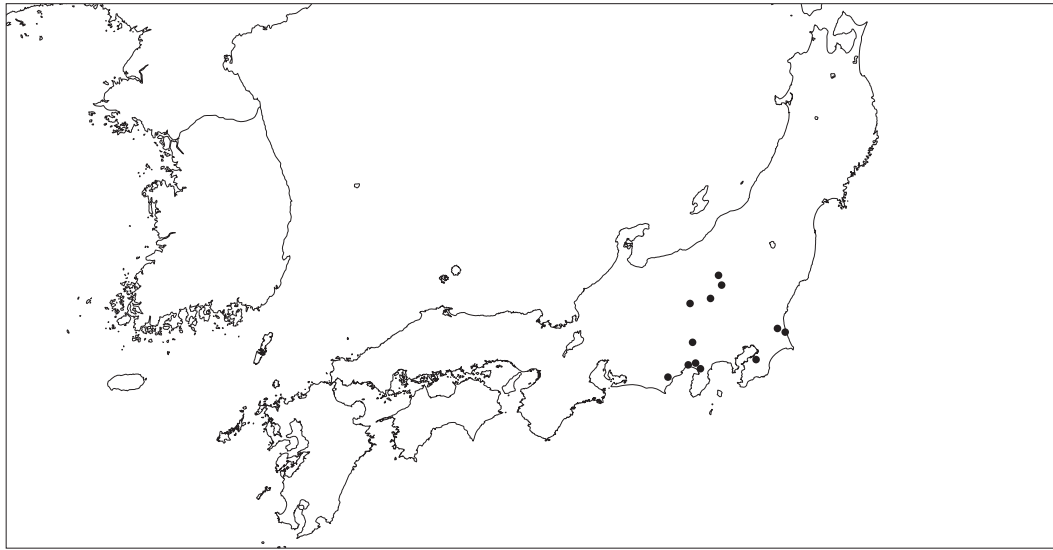
東平 1 号墳と同文様の原分古墳の象嵌鏝を位置づけるにあたり、井田松江 17 号墳例のように眼下に水田を営むような場所はないことから、海を介した東西交通や交易に長けた被葬者像が描ける (滝沢 2000) など、象嵌装大刀保有者集団の性格を、東西交易や軍事などとの関係で捉えた (大谷 2008a) が、東平 1 号墳は、1 段階前の TK43 ～ TK209 に位置づけられ近接して存在する中原 4 号墳 (2 振の波状 C 字文象嵌鏝付大刀・剣) と同様 2 振の同文様の象嵌鏝を持つ点が、中原 4 号墳と性格が類似する被葬者像を描ける。両古墳は近在して存在しており、時期的に 1 世代後の世代と考えられることから、中原 4 号墳の被葬者の性格を引き継いで、東西交易や軍事的な役割を担っていた可能性が高いと考える。

無象嵌円頭大刀の分布と特徴 無象嵌円頭大刀は京都の 1 例はあるものの、象嵌装大刀と同様、静岡、長野以東で確認される。形状は類似しており、生産地も限定され、東日本に重点的に配布された可能性がある。

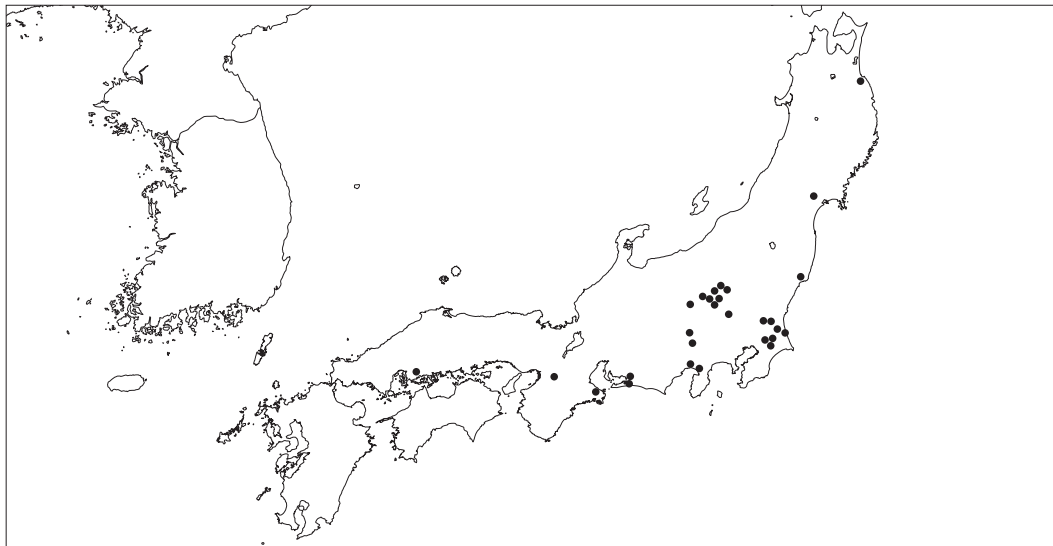
また、5 例中 3 例が棘付花卉形杏葉と共伴しており (註 14)、無象嵌円頭大刀と棘付花卉形杏葉が同じような性格の被葬者に配布された可能性がある。

横長心葉形轡・棘付花卉形杏葉の分布と特徴 横長心葉形轡、棘付花卉形杏葉は 7 世紀前半以降組合関係にあることもあって、いずれも静岡、長野以東に多い (第 83 図、田中 1980、白井 2002)。

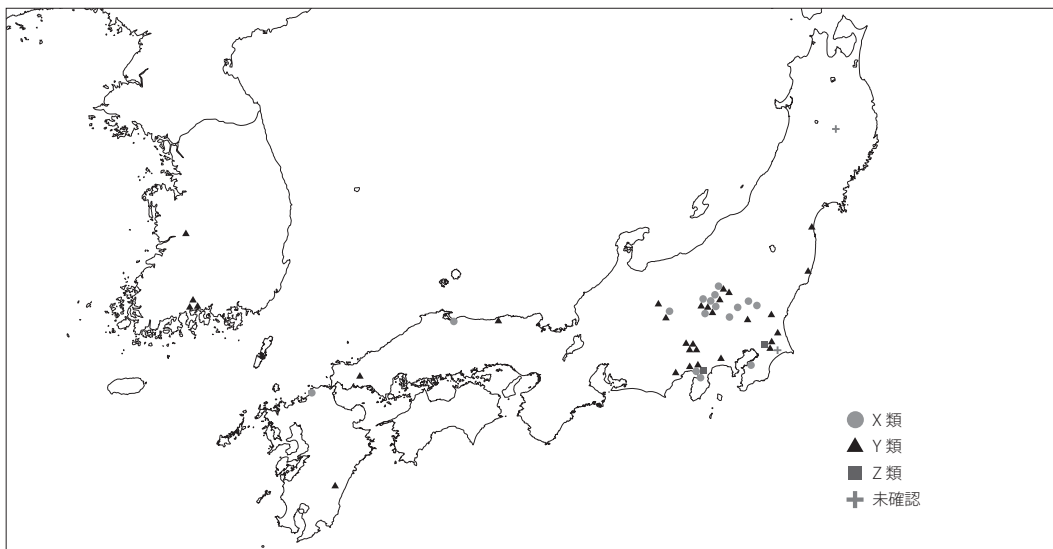
横長心葉形轡の祖形の可能性が高い透十字文心葉形轡は兵庫、滋賀、三重、群馬に、棘付花卉形杏葉の I 段階のものは、奈良、群馬に分布しており、東日本に偏在するわけではない。一方、横長心葉形轡



横長心葉形鏡板付轡



棘付花卉形杏葉



金属製壺鍙

第 83 図 横長心葉形鏡板付轡・棘付花卉形杏葉・金属製壺鍙の分布

が成立以降、横長心葉形轡Ⅰ段階、棘付花卉形杏葉Ⅱ段階、つまり7世紀前半～中ごろ以降東日本を中心に分布する。中でも、東駿河の東平1号墳と千人塚古墳、群馬の奈良古墳群、若田B号墳などのある高崎市八幡地区などにやや集中する傾向にある。同様の性格の被葬者に重点的に配布された可能性を想定できる。

壺鐙の分布と特徴 壺鐙は鈴木一有氏により静岡・長野以東の東日本に偏在することが明らかにされた（鈴木2008）。中でも、東駿河には4例とやや集中傾向にあるとともに、山梨県笛吹市周辺、群馬の高崎市から沼田市・昭和村にかけての地域、千葉の成田市周辺に集中して分布する。これらの地域には上述した横長心葉形轡・棘付花卉形杏葉も分布する。壺鐙・横長心葉形轡・棘付花卉形杏葉の3つを保有する古墳は茨城の成田3号墳、群馬の御門1号墳・奈良古墳群、東平1号墳である。いずれも壺鐙Y類との共伴であり、X類とは横長心葉形轡・棘付花卉形杏葉は共伴しない。この4者は同じような経緯で3種類の副葬品を入手した可能性が考えられる。

また、これらの轡・杏葉・壺鐙は馬具の出土が多い群馬・長野・山梨・静岡（特に駿河）に分布するとともに、千葉・茨城や東北地方の沿岸部にみられる。長野、山梨・静岡・群馬は牧が多く形成され、騎馬軍団の存在が想定されており（岡安1986）、馬匹生産や流通にかかわるような地域に、壺鐙や横長心葉形轡・棘付花卉形杏葉が重点的に配布された可能性を想定したい。

なお、東日本に偏在する壺鐙であるが、西日本にも一定量存在し、そのうちの大半が銅製あるいは金銅製の壺鐙である。東日本でも東平1号墳や半兵衛奥古墳をはじめ銅製のものが出土するが、鉄製が多い。飛鳥Ⅱ期以降、材質による西日本と東日本での使い分けがあった可能性が想定される。

（2）まとめ—大刀と馬具からみた被葬者の性格—

馬具の系譜 壺鐙は最も古いものは綿貫観音山古墳出土のものであるが、内山敏行氏は綿貫観音山古墳の副葬品全体を位置づける中で、壺鐙を朝鮮半島系、特に新羅系の遺物として位置づける。壺鐙には

静岡の半兵衛奥古墳、茨城の宮中野99-1号墳など、新羅系とされる鉄製轡と組み合わせられることもあり（内山2012、高田2015）、7世紀代までその系譜関係が意識されていた可能性がある。また、上述したように横長心葉形轡は新羅系馬具とされる大型矩形立聞の心葉形鏡板付轡や透十字文心葉形轡からの系譜関係にあることが考えられる。棘付花卉形杏葉は、形状が法隆寺の飾金具など仏教美術系のものであり、百濟系と想定される（田中1980）が、棘付花卉形杏葉の祖形が、上述した高崎市観音塚古墳の心葉形杏葉や、形態が類似する棘葉形杏葉である一棘葉形杏葉に形態は類似しており、いずれは祖形となる形態の棘葉形杏葉が出土する可能性が高いとすれば、これらも新羅系であり、新羅系という意識があり、横長心葉形轡と棘付花卉形杏葉がのちに組み合わせられた可能性もある。また、大型矩形立聞円環轡に取り付けられた帯状吊金具は、鉾が3鉾であり、幅広であることは、新羅系馬具（轡）の吊金具の特徴でもある。

そのような馬具を東平1号墳は2組保有していることは、中原4号墳で想定されたように渡来系集団である可能性も視野に入れておく必要がある。

馬具の保有 東駿河は小規模古墳からの馬具の出土が多く、また鉄製環状鏡板付轡が多く出土する地域である（大谷2006）。それも規格性が高く（岡安1985）、全国的に分布する大型矩形立聞円環轡と鉸具造立聞円環轡の2種が8割以上である。東駿河はこれらの馬具の出土数の多さを根拠に「東国舍人騎兵」が存在していたことが想定される（岡安1986）。「舍人騎兵」が存在していたかは今後詳細な検討を行う必要があるが、東駿河の初現期の横穴式石室である富士市中原4号墳（富士市教委2016）からは3組の円環轡が出土し、宮代栄一氏の複数の鉄製馬具を有する古墳の被葬者集団は馬匹生産と関係するという意見（宮代2015）を受けて、東駿河地域でも馬匹生産が始められたと想定した（大谷2016）。中原4号墳以降大型矩形立聞・鉸具造立聞円環轡が富士山麓から箱根山麓まで出土するようになり、継続的に馬匹生産が続けられた可能性がある。このような状況の中、東平1号墳でも大型矩形立聞円環轡を保有することから、馬匹生産にかかわった

可能性がある。ただし、金銅装馬具を有するなど自らが直接生産にあたったわけではなく、生産を総括するような立場であったと考えられる。また、馬は移動手段であることから、岡安氏が想定したように騎兵として活躍した可能性も想定しておくべきだろう。

象嵌装大刀 象嵌装大刀は、上述したように日本の東西を結ぶ海・陸上交通や交易を主とするような被葬者像が描ける（滝沢 2000、大谷 2008a）。

東駿河からみた東平 1 号墳 東駿河は、馬具や装飾付大刀を副葬する古墳が多い地域であるが、時期的な変遷をみると、6 世紀後半代は東駿河全体に分布が見られるものの、7 世紀代まで金銅装馬具や装飾付大刀が出土する古墳は限られる。方頭大刀や蕨手刀が出土するのは東平 1 号墳の周辺地域と、原分古墳や下土狩西 1 号墳のある黄瀬川流域である。黄瀬川流域には東平 1 号墳同様棘付花弁形杏葉が出土した御蔵上 3 号墳や方頭大刀の出土した土狩長塚古墳があり、東平 1 号墳周辺の状況と類似する。

東平 1 号墳を特徴づけるのは、7 世紀代にも装飾付大刀や金銅装馬具が副葬される地域に存在し、金銅装大刀は副葬されないものの象嵌装鍔付大刀 2 振・無象嵌円頭大刀 1 振の装飾付大刀 3 振を保有すること、最先端の金銅装杏葉や壺鐙をはじめとする複数の馬具を保有することであり、東平 1 号墳は 7 世紀前半から中ごろにかけての東駿河西部の有力首長と捉えてよい。ただし、墳丘規模・石室規模、副葬品の質量などを考慮すると地域の中で突出した首長とは言えず、小地域の首長と考えることができる。

東平 1 号墳の被葬者像 東平 1 号墳は、古墳・石室の規模からも同時期の長泉町原分古墳や下土狩西 1 号墳と比較すると小規模である。中原 4 号墳に近在し、両古墳ともに古墳・石室規模が目立って大きくないこと、共通する副葬遺物を保有すること、象嵌装鍔付大刀を複数、馬具を複数保有すること、副葬品から導き出される中原 4 号墳の性格を引き継ぐ小首長だった可能性が高い。東平 1 号墳被葬者集団は中原 4 号墳の持つ役割を継承しながら、中原 4 号墳が保有していない金銅装馬具を保有しており、畿内王権にとってこの地域の重要度が増したことが想定される。東日本に偏在傾向にある馬具や飾大刀が

東駿河以東に多いことを考えると、畿内からみた場合東日本という位置づけがあったことは間違いないが、その中でも定形的な棘付花弁形杏葉の古手のもの、横長心葉形轡の古手のもの、銅製壺鐙が成立する段階のものという最先端の馬具を入手しており、非常に重要視されていた可能性が高い。

東駿河が馬匹生産など重要拠点でありながら、関東、東北への拠点のひとつとして認識され、東駿河の重要度が増加していたからにはほかならない。東平 1 号墳の後、西平 1 号墳（富士市教委 2003）では方頭大刀が副葬され、同地域に富士郡衙が形成されるなど、中原 4 号墳以降郡衙成立まで、徐々に重要度が増していた。また、西平 1 号墳では関東以北、特に東北に多い蕨手刀が出土しており、関東・東北地方との交流があった可能性が高い。

東平 1 号墳の被葬者は、畿内王権が行う東日本との交流を軍事的（馬匹生産）、経済的（東西交通・交易）に支える東駿河の首長として、像を描くことができる。そして、ゆくゆくは彼の子孫が富士郡衙を担う官人層へ成長した可能性を想像しておきたい。

謝辞

執筆の機会をいただきました富士市文化振興課 佐藤祐樹氏に深謝いたします。また、兵庫県伝香美町油良出土の轡の調査にあたり香美町教育委員会石松崇氏にご高配いただきました。さらに小論をまとめるにあたり、文献収集、類例集成などで渥美賢吾氏、岩本崇氏、内山敏行氏、齊藤大輔氏、佐藤信孝氏、鈴木一有氏、瀧瀬芳之氏、深澤敦仁氏、藤村翔氏、右島和夫氏、宮代栄一氏にお世話になりました。明記して深謝いたします。

註

- 1 東平 1 号墳と同形態の鉄製板状鏡板付轡は、「長方形鏡板付轡」と呼称される（内山 1996、佐藤 2005、松尾 1999 ほか）ことが多い。しかし、下辺には心葉形鏡板付轡に特徴的な突起が確認できるものが多く、この轡の祖形と考えられている滋賀県中山古墳出土例や三重県塚山古墳群出土例も隅丸長方形や長方形であるが下辺の突起は確認でき、明らかに突起が意識されている。後述するように、この轡は系譜的には心葉形鏡板付轡の延長線上にあることから、「長方形鏡板付轡」とするのは系譜等を考えた場合適切ではない。したがって、当轡は心葉形鏡板付轡であるが、心葉形でも扁平で横長であることを特徴とするため「横長心葉形鏡板付轡」とする。

なお、当該轡には御門1号墳例のように半円形で下辺に突起がないものが確認できるが、同一系譜上にあることは明らかであり、特に横長であるが突起のないものについては「変形横長心葉形鏡板付轡」とする。ただし、分析に特に必要でなければ「横長心葉形鏡板付轡」とする。

- 2 東平1号墳出土金銅製品(136・137)は、「毛彫馬具(杏葉)」とされる金銅製品と類似するが、「毛彫文様」が施されないだけではなく、立聞(註9参照)が他の個体は板の端をL字形に折り曲げているのに対し、東平1号墳は立聞両側面が切断されており、折り曲げは確認できないことから、杏葉と断定してよいか判断に迷う。全体的な形状、立聞に3鉾打ち込み、裏で小さい方形金具をワッシャーとしてかませて固定する方法が同一であること、東平1号墳からは板状円形飾金具など、他の「棘付花卉形杏葉」と共通する飾金具が出土していることから、いわゆる「毛彫文様」は施されていないものの「棘付花卉形杏葉」と判断した。
- 3 東平1号墳の杏葉はいわゆる「毛彫馬具(杏葉)」とされる杏葉であるが、高松由氏の検討により、「毛彫」とされる文様にも「なめくり打ち」があること(高松2011)、多くの研究者が初期の事例とする群馬県下大島出土例やしどめ塚古墳出土例には毛彫りが施されていないことから、「毛彫馬具」と一括することは適切ではない。

さらに、当該杏葉については、5世紀代に見られる「花卉形杏葉」と関連するとされることがあるが、高松由氏の検討にもあるように5世紀代のものとは全く別系統である可能性が高く(高松2011)、それらと同様の名称がつけられているのは系譜関係があるように捉えられる危険があることから、形態的には棘葉形杏葉に類似するが、「棘付花卉形杏葉」(高松2011、森田2005ほか)としたい。

- 4 古墳等の名称の後ろに参考文献を示さないものについては、各表の文献を参照願いたい。
- 5 川江秀孝氏は象嵌装大刀Aに伴う可能性を想定している(川江1992b)が、ここで示した通り象嵌装大刀Bに伴う可能性が高い。
- 6 松尾氏は、轡の連結方法を3種類に区分し、リベット留技法(Ⅲ類)に位置づけた。さらに、リベットを覆金具で覆うもの(ⅢA類)、リベット留を平板な1枚板を鏡板全体にかぶせて隠すもの(ⅢB類)、リベット留が露出するもの(ⅢC類)に区分した(松尾1999)。松尾ⅢC類は轡の連結方法により、筆者はさらに3種類に区分する(第78図参照)。

なお、リベット留を用いる轡の連結方法であるが、ここではリベットを形成する場所と銜・鏡板・引手の連結方法により、東平1号墳は遊環にリベットを作り鏡板を留める一方で、引手は銜に連結されることから、「遊環リベット留・銜介在型連結」と呼称する(第78図参照)。

- 7 仁田山ノ崎古墳の鉄製透十字文鏡板付轡は現状で楕円形とされるが、筆者は古墳時代後期後半以降で鉄製一枚造で楕円形とされるものを確認できなかったことや、こ

で論じるように大型矩形立聞である透十字文鏡板付轡は心葉形であることから、心葉形の突起が失われ楕円形に見えるようになっていただけであり、本来は心葉形であったと推断する。

- 8 透彫で毛彫文様のある法隆寺の飾金具や道上古墳例を毛彫文様のない透彫のしどめ塚古墳例や下大島出土例よりも古く位置づける(田中1980他)が、毛彫が施されない透彫から毛彫のある透彫へ変化した可能性も想定しておく必要がある。

なお、棘付花卉形杏葉の祖形として、形態が類似する棘葉形杏葉が想定されるが、群馬県高崎市八幡観音塚古墳の著名な火炎形透のある心葉形(光背形)杏葉が心葉形杏葉に棘が確認できることから、棘付花卉形轡の祖形の一つとして想定したい(第79図)。

- 9 杏葉の尻繫に装着される部分は立聞とされることが多いが、その部分について棘付花卉形杏葉は「頭部」とされることがある。しかし、杏葉であれば、他の杏葉と同じく「頭部」ではなく、「立聞」としたほうがよい。
- 10 A・B類ともに文様が類似しているため工人集団は近い関係にあった可能性が想定される。A類、B類の違いは金具にあらわれない尻繫など馬装全体の違いに表れていた可能性を想定しておくべきかもしれない。
- 11 原分古墳例の踏込の舌の透孔は穿孔ではなく、コ字形の外枠を取り付け、その間に短い鉄棒を配して接合した可能性が高い。踏込の舌を作るための試行錯誤段階の製品の可能性があり、Y類の初現段階である可能性が高い。
- 12 本来別々の馬具に伴うものであったものが、片方ずつ壊れ、残った片方ずつを組み合わせた可能性がある。
- 13 朝鮮半島では、4点出土しているが、壺鍔はY類で、いずれも無突起a類である。韓国の事例は7世紀代と想定され、日本のY類と同時期であるが、軸部の形態が異なる可能性がある。また、馬老山城出土例では、穿孔ではなく、刻みを入れることで滑り止めを形成しており、それも日本列島のものと異なる。ただし、類例が少ないため、今後の増加を俟って再検討する必要がある。
- 14 東平1号墳、東一本柳古墳と立野12号墳では時期差があることから、長年にわたり棘付花卉形杏葉と無象嵌円頭大刀が同時に配布(流通)していた可能性を考えておく必要がある。

参考文献

【論文等】

- 岩原 剛 2002「東海の飾大刀」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会
- 臼杵 勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 内山 敏行 1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 内山 敏行 2012「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』豊橋市教育委員会
- 大谷 宏治 2006「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会
- 大谷 宏治 2008a「原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格」『原分古墳』調査報告編 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷 宏治 2008b「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40 静岡県考古学会
- 大谷 宏治 2011「象嵌装大刀の変遷」『考古学ジャーナル』No.616 ニューサイエンス社
- 大谷 宏治 2014「古墳時代後期～終末期の鐙轡の新例」『研究紀要』3 静岡県埋蔵文化財センター
- 大谷 宏治 2015「古墳時代後期以降の鉸具式・板状掛留式立聞鐙轡の特質」『河上邦彦先生古稀記念論集』河上邦彦先生古稀記念会
- 大谷 宏治 2016「中原4号墳出土大刀と馬具からみた被葬者の性格」『伝法中原古墳群』富士市教育委員会
- 岡安 光彦 1984「いわゆる『素環の轡』について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 岡安 光彦 1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』2 古墳文化研究会
- 岡安 光彦 1986「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵」『考古学雑誌』71 巻4号 日本考古学会
- 岡安 光彦 1987「遺物編年の現段階（馬具）」『古墳文化研究会第7回研究発表・討論会発表要旨』（古墳文化研究会2010『日本古代文化研究』に所収）
- 川江 秀孝 1992a「馬具」『静岡県史』資料編3 考古3
- 川江 秀孝 1992b「飾大刀」『静岡県史』資料編3 考古3
- 斎藤 弘 1985「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』2 古墳文化研究会
- 佐藤 信孝 2004「群馬県高崎市若田B号墳出土馬具の検討ー毛彫馬具の雲珠について」『専修考古学』10 専修大学考古学会
- 佐藤 信孝 2005「終末期古墳出土馬具の変遷ー長方形鏡板付轡の変遷」『電腦考古学』1
- 白井 久美子 2002「金銅装毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県史料研究財団
- 神 啓崇 2017「馬具の構造変化とその意義」『平成29年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会
- 鈴木 一有 2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳』調査報告編 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 高田 貫太 2015「八幡観音塚古墳の副葬品をめぐる地域間交渉」『改訂版「観音塚古墳の世界」』高崎市観音塚考古資料館
- 高松 由 2011「棘付花弁形杏葉の変遷と彫金技術」『待兼山論叢』史学篇45 大阪大学
- 滝沢 誠 2001「総括」『井田松江古墳群』静岡県戸田村教育委員会
- 瀧瀬 芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 瀧瀬 芳之・野中 仁 1995「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」『研究紀要』12 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中 新史 1980「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢ー滝口宏先生古希記念考古学論集』早稲田大学出版部
- 千賀 久 2003「日本出土の『新羅系』馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学』同成社
- 土屋 長久編 1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会
- 東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と飾大刀』
- 西澤 正晴 2002「遠江・駿河における鉄製板鐙の変遷と展開」『研究紀要』9 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 福島県文化財センター白河館 2002『弘法山のよこあなー古代ガラスと象嵌の世界』
- 松尾 光晶 1999「上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
- 宮代 栄一 2015「熊本県球磨郡多良木町赤坂古墳群出土遺物の研究」『熊本古墳研究』6 熊本古墳研究会
- 桃崎 祐輔 2014「馬具からみた九州の地域間交流」『古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会
- 森田 安彦 2005「毛彫施文の金銅装棘付花弁形杏葉の編年的位置付けについて」『立野古墳群』江南町教育委員会
- 【報告書】
- 檀原考古学研究所 1990『斑鳩藤ノ木古墳第1次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 檀原考古学研究所 1995『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『原分古墳』
- 高崎市教育委員会 1992『観音塚古墳調査報告書』
- 能登島町教育委員会 2001『史跡須曽蝦夷穴古墳Ⅱ』（石川県）
- 富士市教育委員会 2003『東平遺跡発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2016『伝法 中原古墳群』
- 八頭町教育委員会 2014『福本70号墳発掘調査報告書』（鳥取県）

第5表文献（鉄製円頭大刀）

1 群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『下触牛伏遺跡』、2 江南町教育委員会2005『立野古墳群』・熊谷市史編さん室2015『新熊谷市史』資料編1 考古、3 かながわ考古学財団2002『比奈窪中屋敷横穴墓群』、4 土屋長久編1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』 信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会、5 京都市文化観光局1987『醍醐1号墳発掘調査概報』昭和61年度

第6表文献（帯状吊金具付大型矩形立間環状鏡板付轡）

1 東松山市教育委員会1999『古凍14号墳（第1・2次）』、2 愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団1976『二本松古墳群』、3 宮代栄一1997「古墳時代の面繫構造の復元」『HOMINIDS』Vol.1・仁多町教育委員会2005『大トシ谷横穴墓・玄蔵坊横穴・コフケ横穴・川子原横穴・上分中山横穴群』

第7～9表文献（横長心葉形鏡板付轡・棘付花弁形杏葉）

1 茨城県教育財団1998『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』、2 茨城県教育委員会1970『宮中野古墳群調査報告』、3 千葉県2003『千葉県の歴史』資料編考古2、4 佐藤信孝2005「終末期古墳出土馬具の変遷ー長方形鏡板付轡の変遷」『電腦考古学』1、5 白井久美子2002「金銅装毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』 千葉県史料研究財団、6 佐藤信孝2004「群馬県高崎市若田B号墳出土馬具の検討ー毛彫馬具の雲珠について」『専修考古学』10 専修大学考古学会、7 山梨県1999『山梨県史』資料編2 原始・古代2、8 土屋長久編1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』 信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会、9 田中新史1980「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢ー滝口宏先生古希記念考古学論集』 早稲田大学出版部、10 富士市文化振興課のご教示による、11 藤枝市埋蔵文化財調査事務所1980『原古墳群白砂ヶ谷支群』、12 石川正之助・佐藤信孝ほか2010「しどめ塚古墳」『榛名町誌』資料編 高崎市、13 東海古墳文化研究会2006『東海の馬具と飾大刀』、14 古柳塚古墳研究会2004「古柳塚古墳の研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告書』12、15 榛原町教育委員会1986『仁田山ノ崎古墳出土品保存修理報告』、16 鳥取県教育文化財団2002『小畑古墳群』、17 森田安彦2005「毛彫施文の金銅装棘付花弁形杏葉の編年的位置付けについて」『立野古墳群』 江南町教育委員会、18 高崎市観音塚考古資料館2017『小さな古墳の物語』・群馬県古墳時代研究会1999『群馬県内の横穴式石室Ⅱ』、19 江南町教育委員会2005『立野古墳群』・熊谷市史編さん室2015『新熊谷市史』資料編1 考古、20 千葉県史料研究財団2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』、21 山梨県教育委員会1979『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書ー北巨摩郡双葉町地内2ー中巨摩郡竜王町地内ー』、22 静岡県1931『静岡県史』第2巻 名著出版、23 愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵

文化財調査団1976『二本松古墳群』、24 豊橋市教育委員会2002『馬越長火塚古墳群』

第10表文献（壺鐙）

1 東京国立博物館1980『東京国立博物館図版目録古墳遺物編（関東Ⅰ）』、2 壬生町教育委員会2001『藤井古墳群』、3 斎藤弘1985「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』2、4 石川正之助・佐藤信孝ほか2010「しどめ塚古墳」『榛名町誌』資料編1 高崎市、5 群馬県古墳時代研究会1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』、6 高崎市1999『高崎市史』資料編1、7 群馬県教育委員会1999『綿貫観音山古墳Ⅱ』、8 天理大学1988『ひとものこころ』 天理大学附属天理参考館蔵品 縄文・弥生・古墳』天理教道友社、9 東松山市教育委員会1999『古凍14号墳（第1次・2次）』、10 千葉県2002『千葉県史編さん資料千葉県古墳時代関係資料』、11 名古屋博物館1985『特別展古墳時代の馬具』、12 川江秀孝1992「馬具」『静岡県史』資料編3、13 米子市教育委員会1989『石州府古墳群発掘調査報告書』・米子市史編さん協議会1999『新修米子市史』7 資料編考古、14 花田勝弘2000「筑紫・宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』85-1 日本考古学会、15 山田隆博2017「宮城県山元町合戦原遺跡の調査ー横穴墓群の調査を中心に」『研究発表資料集』日本考古学協会2017年度宮崎大会実行委員会、16 檜葉町教育委員会1989『名古屋横穴群調査報告』・野馬追の里原町市立博物館2000『鐙ーその歴史と美ー』、17 茨城県教育財団1998『北浦複合団地造成事業内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』、18 昭和村教育委員会1996『川額軍原Ⅰ遺跡』、19 東京国立博物館1983『東京国立博物館図版目録古墳遺物編（関東Ⅱ）』、20 高崎市1999『高崎市史』資料編1、21 藤岡市1993『藤岡市史』資料編、22 千葉県企業庁1975『公津原』、23 伊勢原市教育委員会1995『三ノ宮・下尾崎遺跡 三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書』、24 後藤守一1928「原始時代の武器と武装」『考古学講座』6、25 山梨県1999『山梨県史』資料編2、26 古柳塚古墳研究会2004「古柳塚古墳の研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告書』12、27 長野県考古学会1966『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告ー昭和40年度ー』、28 松本市教育委員会1990『大塚古墳 南方古墳 南方遺跡』、29 静岡県埋蔵文化財調査研究所2008『原分古墳』、30 川江秀孝2010「静岡市半兵衛奥古墳とその遺物Ⅲ」『静岡県考古学研究』41・42 合併号、31 岩美町教育委員会1992『高野坂古墳群発掘調査報告書』、32 山口県2000『山口県史』資料編 考古1、33 宮代栄一1995「宮城県出土の馬具の研究」『九州考古学』70 九州考古学会、34 国立清州博物館1990『三国時代馬具特別展』、35 光陽市・順天大学校博物館2005『光陽馬老山城Ⅰ』、36 東日本埋蔵文化財研究会1997『遺物からみた律令国家と蝦夷』、37 萩悦久1992「下総東部における終末期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』44

図の出典

第 73・74・76 図 本書より作成

第 75 図 第 5 表文献より引用

第 76 図 第 6 表文献より引用

第 77 図 1・5（本書）、2（能登島町 2001）、3（福島県文化財センター 2002）、4（東海古墳文化研究会 2006）、6（静岡県埋文研 2008）

第 78～80 図 第 7～9 表文献より引用

第 81 図 第 10 表文献より引用

第 82 図 筆者作成

第 83 図 第 7・9・10 表を基に富士市教育委員会作成